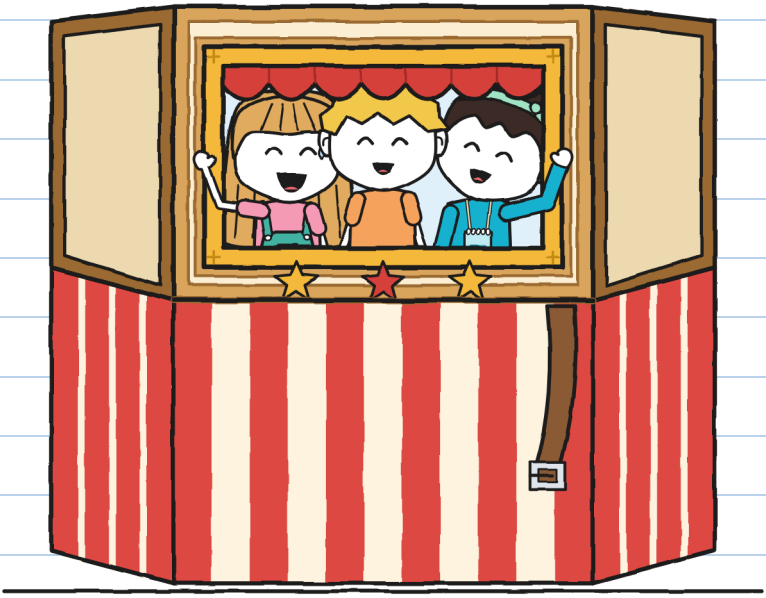
ありえない はいたつ・6

ばしょは さんにんぶん

LinguAula



（グニの ノート）

サイズ L
上級・11+

ありえない はいたつ・6
ばしょは さんにんぶん

文と絵：LinguAula

サイズ L・上級・11+

日本語版：LinguAula

しょはん：2026

© 2026 LinguAula · info@linguaula.com

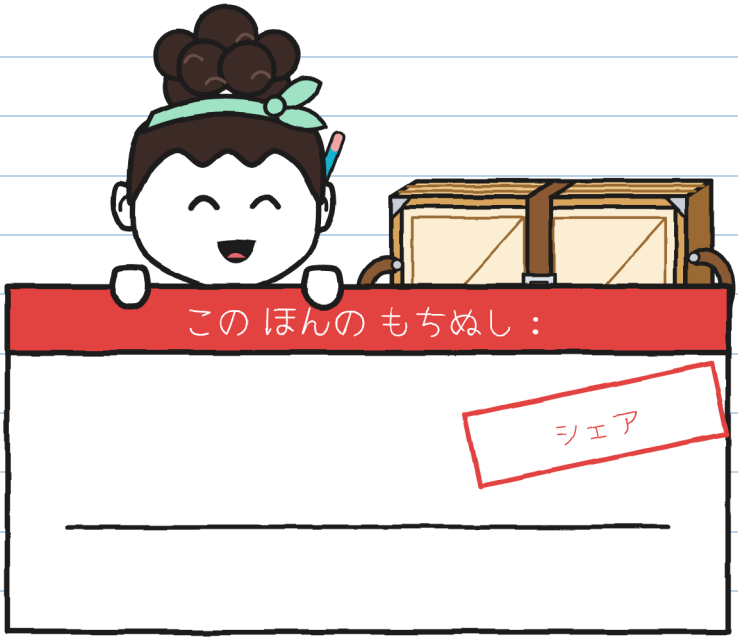
自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

シリーズの6さつめ。これまでの本は「このにもつはかみつく」「かみなりまえにあけるな」「へんそう、おねがいします」「ここじゃダメ、パンくず！」「ふたりでひとつのケーキ」。

LinguAula

linguaula.comでしょうごとにれんしゅう

3にんで はこぶ。とっては きめた。 —J.



シェア。みんな はいる。 —J.

見つけたら、たたんで返してね。

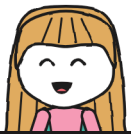
おはなしの なかだけ

このはんこは、お話の中だけで起きることのしるし。ほんとうのドラゴンはいないし、荷物もとんでもどってきたりしない。ほんとうにはこぶときは、76ページを見てね。 —J.

だれが だれ？



グニ。センチで はかる。こんしゅうは、ほかの ことも かぞえる。



フリータ。みちは しっている。せつめいは、べつの はなし。



ノア。フリータの むかしからの ともだち。ほで はかる。ほは いつも みに つけて いる。



イレーネさん。げきの こうぼうを している。どっちへ、とは いわない。「とまれ」と いう。



トニョ。イナズマでんと、みせの ひと。じかんを はかるだけで、いけんは いわない。ほとんど ね。



マラさん。にもつは かす。はこは はなさない。



6ばん。はこに はいる ぶたい。ベルトを だれも おさえないと、すきな ところで ひらく。



R.は さしだしひと。こんかいは、びひんリストに 1ぎょう のこした。

グニの
はいたつノート6

シェア。



はり

ノート5は、文字ばんに2本の針があるところで終わった。これはみかんみたいなオレンジ色で、店のはんこもついている。

1ページ目に、ことばを一つだけ書いて、ページの半分は念のためあけておいた。あいていたのは、1分もなかった。

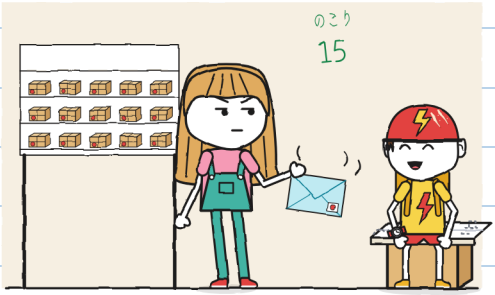
1ページ目は、わたしの字でシェアした。 —J.

第 1 章

どうして 3にん ひつようなの？

月曜日、学校から帰ると、フリータがカウンターでふうとうを持ってまっていた。みどりでも青でもない。ターコイズ色で、まだとじたままだった。

「ゆうびんやさんがもってきたの。『ありえないはいたつ』あて。しばらくあけてない」
「どのくらい？」
「28分だぜ」と、トニョがとけいを見ながら言った。
「このまちのきろくだ」

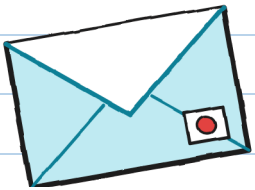


わたしのじゃなかった。ひとのふうとうは3ばいおもい。 —J.

マラさんはつめであけた。

イレーネです。ちいきセンターの げきの こうぼうの たんとうです。
びひんリストを こうしんして いて、1ぎょう みつけました：
「おりたたみの ミニぶたい：うけとりまち」
そちらに ありますか？
31にちの どようびは、まちの ラリーです。
ミニぶたいが たたんだ まま うちの なかにわに とどいたら、
3にんの チームが はこんで きたら、その ばで サインします。
ノアの チームには さんにんぶんの ばしょが あり、いまは ノアだけです。

フリータ、わたしだよ！いま、げきを やって いるの。
にもつに くわしい だれかを つれて きてね。ーノア

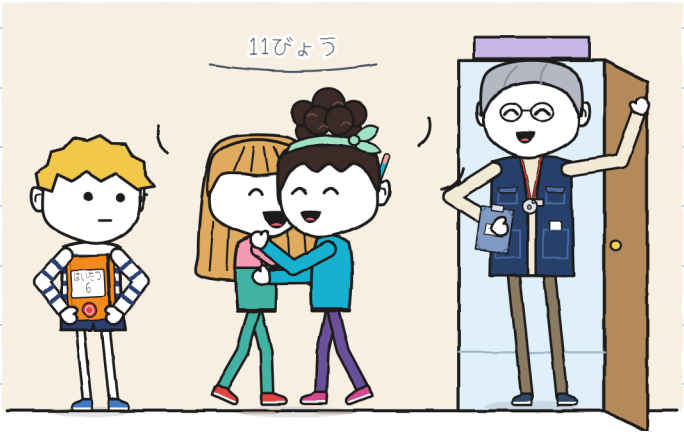


「にもつにくわしいだれか」。それはぼくだ。「にもつ」のほうは気に入った。「だれか」のほうは、あまり。

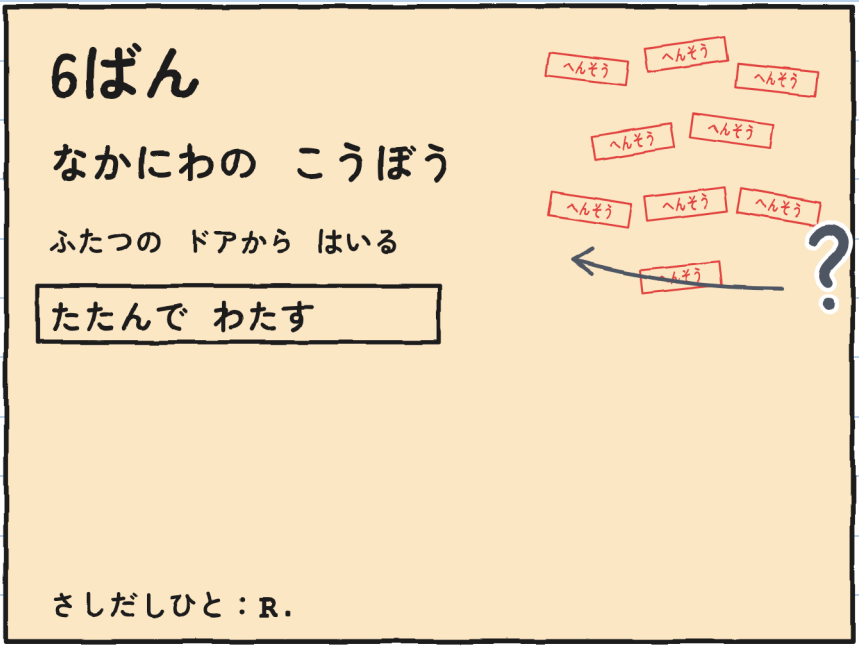
5時に、ふたりが来た。イレーネさんはファイルをかかえ、ポケットだらけのベストを着て、首からホイッスルをさげていた。ノアはひもでメモちょうをぶらさげ、耳のうしろにターコイズ色のえんぴつをさしていた。

フリータとノアは、はかれるほど長くだきあった。11秒。ぼくはすみでノートを持っていた。ノートには、こういう役目もある。手に持つものをくれることだ。

「この子がグニ」とフリータが言った。「荷物にくわしいの」
「はじめまして、荷物にくわしいグニ」とノアは言って、ぼくの名前をメモちょうに書いた。



マラさんは青いいすにのぼって、たなから6番をおろした。ほかと同じ箱。



「はんこは9こ」とフリータが言った。
「『ふたつのドア』」とノアが読んだ。「ふたつのドアって？」

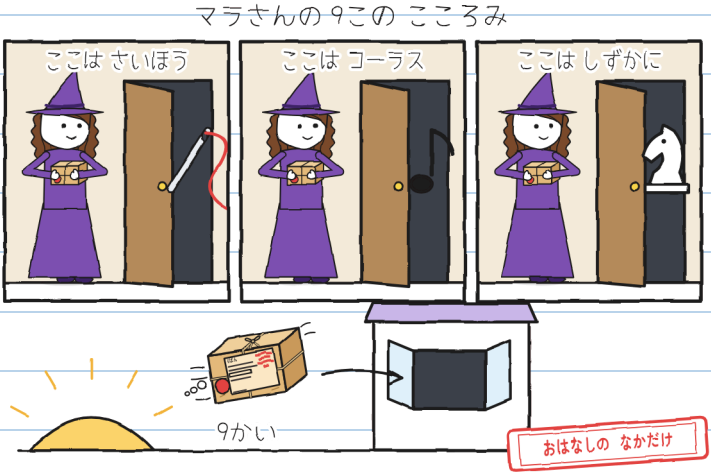
イレーネさんは知らなかった。マラさんも。ぼくははてなマークをつけてメモした。

「9回持っていったわ」とマラさんは言った。「月曜日はさいほうが開けてくれた。水曜日はコーラス。金曜日はチェス。『こうぼう？ここじゃないよ』って。こうぼうあてのサインは、だれもしてくれなかったの」

「劇（げき）は中庭でれんしゅうしています」とイレーネさんは言った。「それに、中庭にはベルがありません」

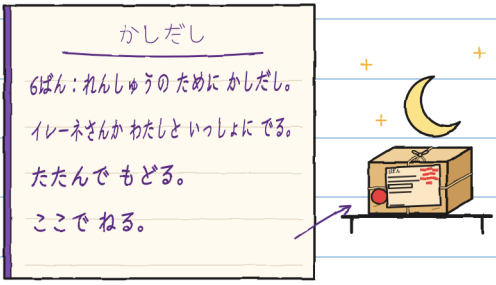
ファイルを開いて、マラさんにセンターのはんこのついた紙を見せた。

「今、登録ずみです：『劇（げき）のこうぼう。担当（たんとう）：イレーネ』。こうぼうあてでも、もうサインする人がいます」



「サインする人がいるなら、どうしてマラさんが箱に入れて、エリアさんの台みたいに運ばないの？」とフリータが聞いた。
「箱に入れて、もう9回運んだわ」とマラさんは言った。
「これからは、受け取る人が条件を決めるの」
「おりたたみのミニぶたいは、広場へ持っていくものです」とイレーネさんは言った。「子どもたちが町の道を運べるか、たしかめます。運べないなら役に立たず、役に立たないものにはサインしません」

「それ、もうパンやさんで聞いたわ」とマラさんは言った。そしてノートに自分の条件を書いた。ラベルは箱につけたまま、箱はマラさんのところ。

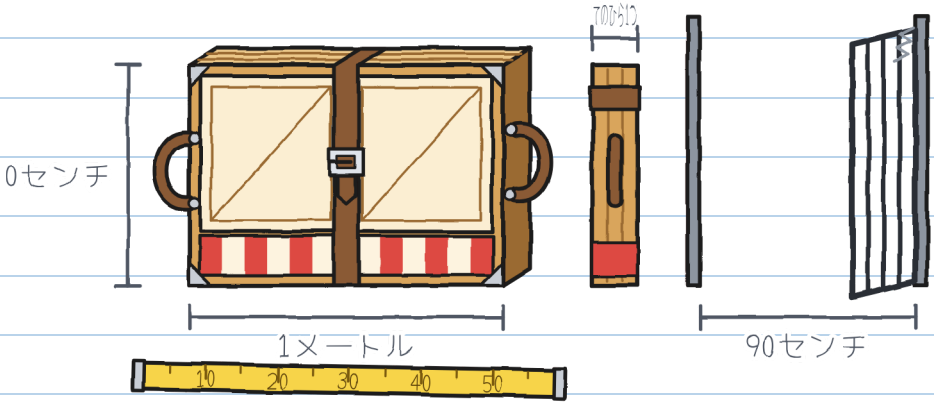


棚でねていれば、夜明けにもどる場所がない。はんこは9つのまま。聞いてみた。 —J.

火曜日に、地域センターの中庭へ行った。道から鉄の門を通って入る。その門はひとりでにしまる。

マラさんは箱をゆかにおいて、ふたをはずした。出ると、ミニぶたいはエリアさんの台みたいに大きくなった。ぼくはもうおどろかない。まきじゃくを出す。

6ばんの おおきさ

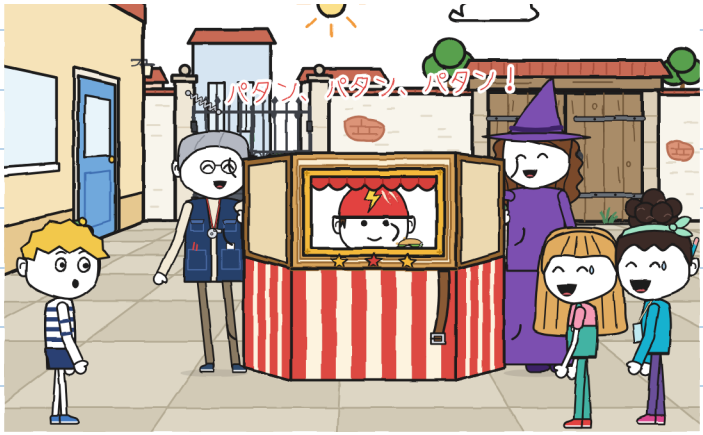


横に立てれば、門を通れた。それは簡単なほうだった。

まずなによりも、イレーネさんはぜんぶそろっているかたしかめたがった。ベルトをはずして、つつみを回した。パネルは重みでひとりでに開いた：パタン、パタン、パタン。出てきたのは、3つのかべと短い幕、奥のパネルのまどわくをそなえたぶたい。

まどから、サンドイッチを持って通りかかるトニョが見えた。口がいっぱいで、あいさつできなかった。

「ぜんぶそろっていますね」とイレーネさんは言った。「こうぼうのきまりです。手はとって。ちょうつがいには絶対にダメ。そして曲がるときは、だれかがベルトをおさえます」



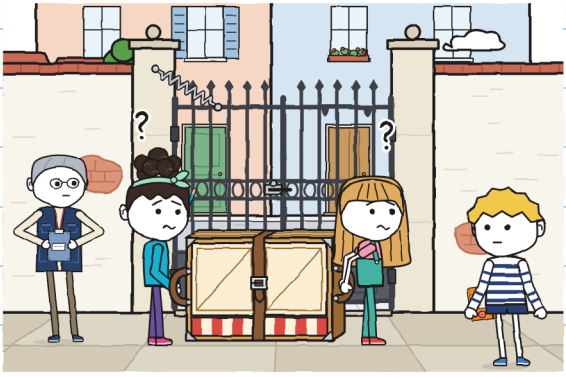
イレーネさんとマラさんはミニぶたいをたたんで、ベルトをとめた。

「わたしたちで試してみる」とフリータが言った。ノアはもう、もう一つのとってに手をかけていた。

3まで数えて、持ちあげた。持てた。中庭を1周した。門のところに着いた。門はしまっていた。

フリータは門を見た。ノアも。手はぜんぶで4つ、4つともふさがっていた。

ぼくは2メートルはなれたところで、自分の両手があいていて、ノートを持っていた。



ぼくはせなかで門をおさえた。ふたりは通った。イレーネさんはファイルになにか書いた。

その日の午後、ぼくはこのノートの装置（そうち）を発明した。

3にんメーター

くかんごとに、だれが なにを する

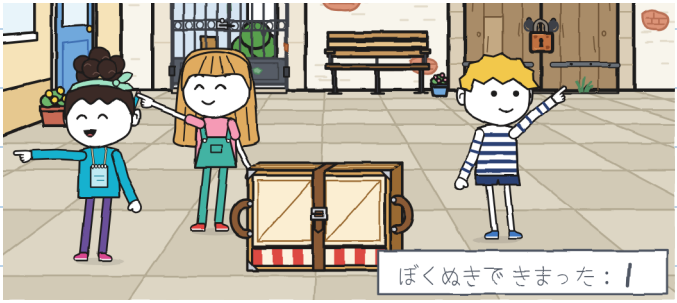
	もつ 	あんない 	みちあけ 
なかにわ、1かいめ	フリータと ノア	フリータと ノア	
なかにわ、2かいめ	フリータと ノア	フリータと ノア	グニ

同じ名前が2つと、からのマスが1つ：通れない。マスがうまっていれば、通れる。

もう一つ、小さいこともメモした：「門は、石でもおさえられる」

まだラベルの意味がわからなかった。
「『ふたつのドア』って、門の2枚のとびらのことだよ」
とフリータが言った。
「どっちも開けなきゃ」とノアが言った。
「先にへいの外側をはかれるよ」とぼくは言った。
3人でさした。フリータは門、ノアは工房、ぼくは道。
「あとで」とふたりは言った。

ぼくはひとりで行って、へいをぐるっと回って、なにかを見つけた。もどると、ふたりはぼくが来る前の町のできごとで笑っていた。ぼくは口を開けた。
「もう決まったよ、グニ」とフリータが言った。「2枚のとびらだよ」
ぼくは口を閉じた。ノートも閉じた。



そのぼうせんは、2日あとに見た。わたしの。 —J.

第 2 章

だれが みちを しっている？

水曜日は最初のルートの日：店から中庭まで、道を歩く。ぼくが着いたとき、メーターはもううまっていた。みどりで。

「グニとノアが持つ」とフリータが言った。「わたしは案内。道を知っているから。それに前を歩くから、道あけもする」

「ここへ来る途中（とちゅう）で考えたの」とノアが言った。

みどりで書いたものは消えない。2本めのぼうせん。

3にんメーター

	もつ	あんない	みちあけ
なかにわ、1かいめ	フリータと ノア	フリータと ノア	
なかにわ、2かいめ	フリータと ノア	フリータと ノア	グニ
みせ → なかにわ	グニと ノア	フリータ	フリータ



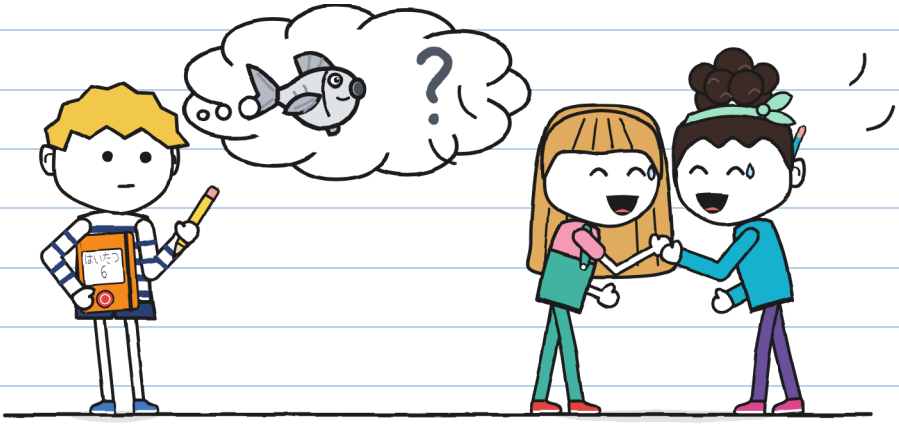
ぼくぬきで きまった：11

「出かける前に、地図を作ってもいいと思う。曲がるところに番号をつけて」とぼくは言った。
「地図はいらないよ」とフリータが言った。「かたひれの魚まで、ずっとまっすぐ」

ノアはふきだした。フリータも。

「どの魚？」
「かたひれの魚は、かたひれの魚」とノアが言った。
「長い話だよ」とフリータが言った。
「しかも、すごくいい話」とノアが言った。

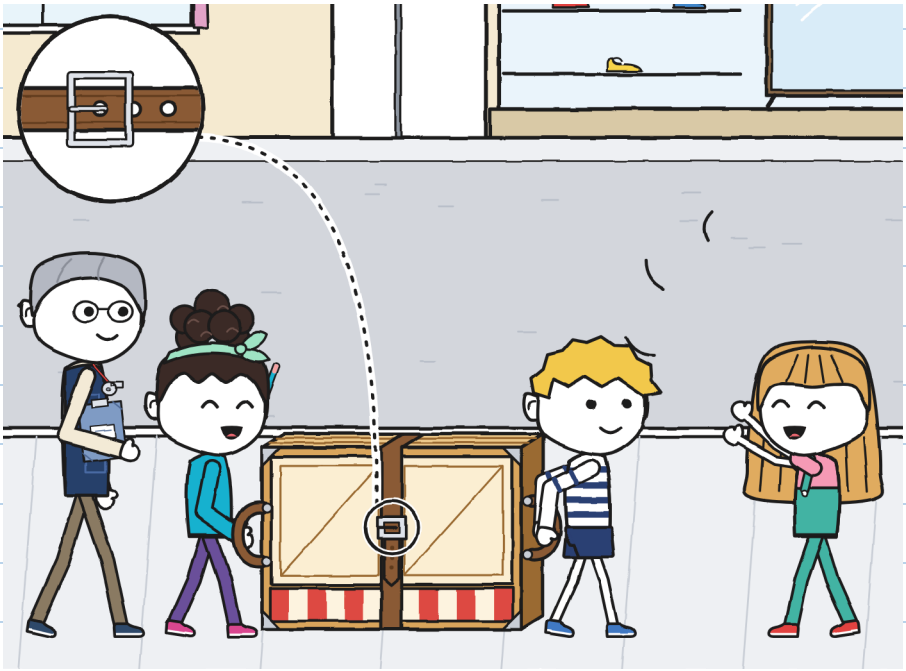
その話は聞けなかった。3本めのぼうせん。



マラさんは店の入りぐちで、箱からミニぶたいを出した。ノアはベルトを1つめの穴にとめた。

「こうしておくと、着いたとき早くはずせる」

ぼくが前で、ノアが後ろ。前は道が見える。後ろはミニぶたいしか見えない。イレーネさんは最後について来た。ファイルとホイッスルを持っていた。どっちへ、とは言わない。段差があるときに「とまれ」と言った。

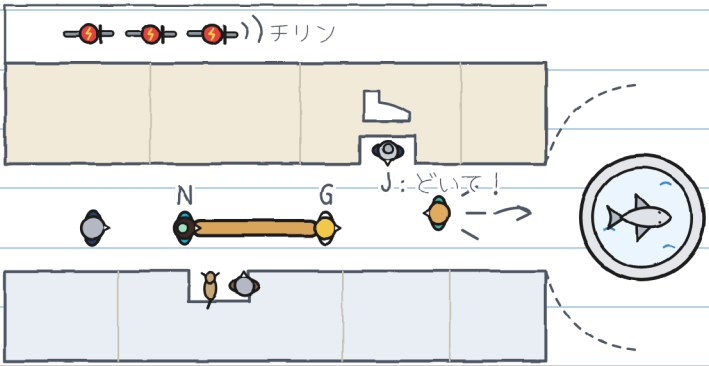


フリータはみちあけがとてもうまかった。

「どいてどいて、ぶたいが通るよ！」

くつやさんが見に出て来た。犬を連れたおじさんが、げんかんのところで待っていた。遠くの、町の反対がわで、ベルが鳴った。チリン。

「イナズマは自分たちのコースをれんしゅうしているの」とノアは言った。「むこうは自転車でふうとうを運ぶ。わたしたちは歩いて、これを運ぶ」
「これを持って走ってはいけません」とイレーネさんは言った。

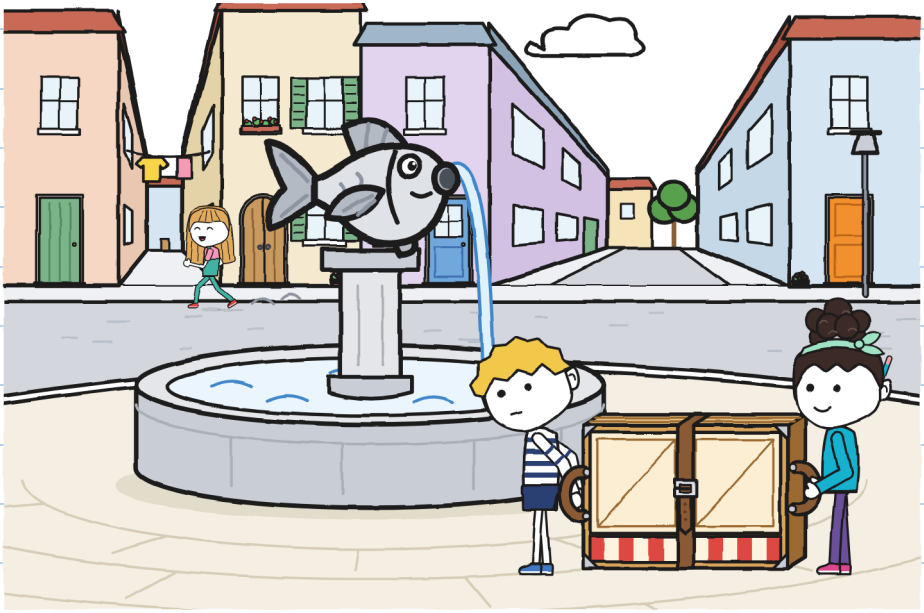


ふんすいの広場に着いた。フリータはふりかえって指示(しじ)をさけぶと、センターのほうへかけだした。門をおさえにいくために。

「かたひれの魚まで、そして曲がる！」

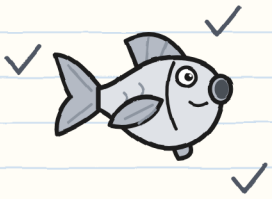
そしてもういなかった。

ふんすいのまんなかに、石の魚がある。よく見た。ぼくのがわからは、ひれがぜんぶあった。

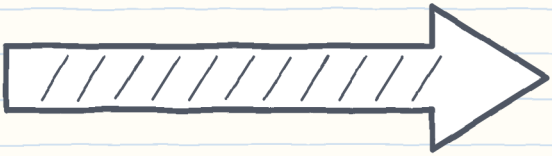


早く考えた。ぼくの得意なことじゃないけど。

ふんすいの 魚：ひれは 見える 分 ぜんぶ。
かたひれ じゃ ない。
べつの さかなが いるはず。



まがる：どっちへ？
ひだり、せまい みち
みぎ、ひろい みち
ミニぶたいには 広い 道が いい

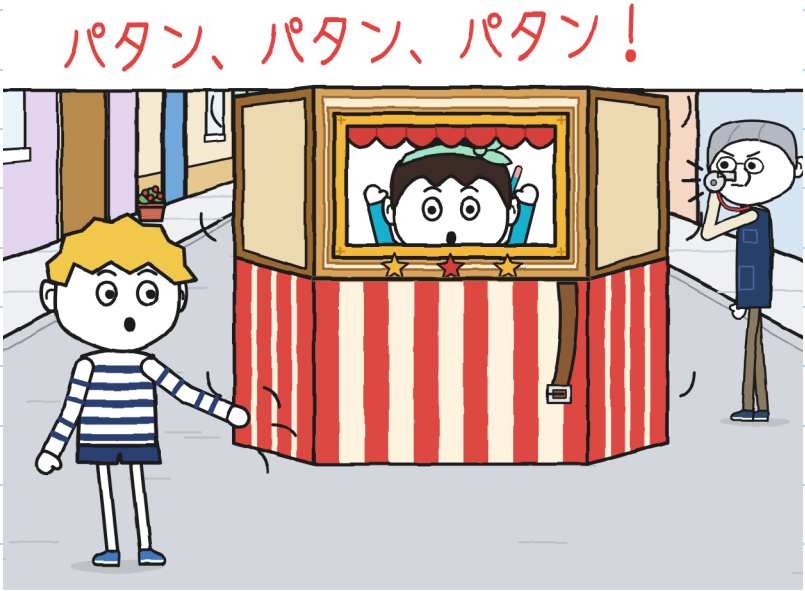


「もう曲がる？」とぼくは後ろに向かって聞いた。
「かたひれの魚で！」とノアがミニぶたいの後ろから言った。

べつの魚をさがしつづけた。いなかった。ぼくは右へ曲がった。

だれも「曲がるよ」と言わなかった。だれもベルトをおさえなかった。1つめの穴にかけたバックルは、あまりもたない。
パタン。パタン。パタン。

パネルはノアのまわりで、ゆっくり、つぎつぎに開いた。イレーネさんはホイッスルを鳴らした。音がおさまると、道のまんなかにぶたいがあって、その中にノアがいた。
「こんにちは」と、ノアはまどから言った。

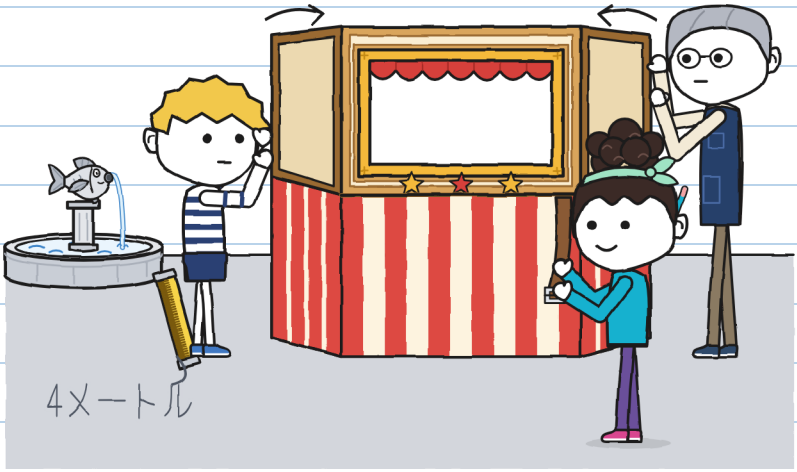


イレーネさんはノアの手を見た。それからぼくの手を見た。どれも無事だった：パネルは軽くて、ゆっくり開く。

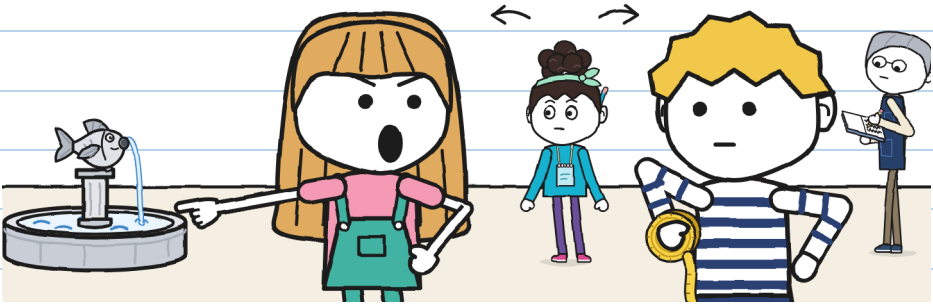
「だれが案内していたの？」とイレーネさんが聞いた。

だれも答えなかった。案内していた人は、2ブロック先で門をおさえていた。

イレーネさんとぼくは、よこぼうに手をかけてたたんだ。その間に、はかった：ぼくの足からふんすいまで、4メートル。



フリータが走ってもどって来た。
「だって、かたひれの魚のところって言ったでしょ！」
「どのかたひれの魚？」
「あれ！」フリータはふんすいを指さした。「左へ。いつものとおり」
「『いつも』って、ぼくが来る前のことだよ」
フリータはイレーネさんのほうを向いた。
「グニがまいごになったの」
ぼくはまいごになっていなかった。どこにいるか、ちゃんとわかっていた：ふんすいから4メートル。はかったばかりだったから。
それもぼくぬきで決まった。4本めのぼうせん。



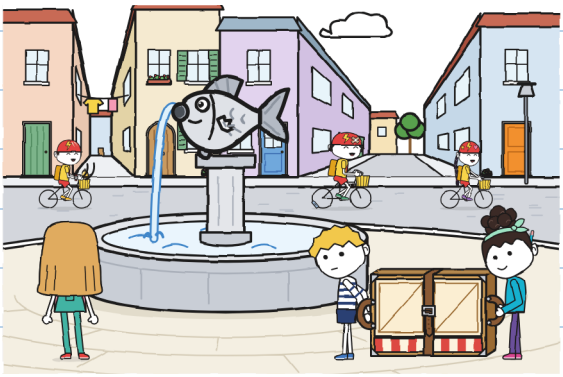
大きな声で、人の前で言った。わかっている。 —J.

魚の反対がわを見せてもらった。左のひれがない。ないものを見るには、ないと知っていなければならない。

区間のまがりをもういちどやった。1回目は「まがる」を早すぎるときに言った。2回目はおそすぎ。3回目はできたけど、だれもしゃべっていなかった。

そこへ、イナズマが道路を通った：ゾエ、ブルーノ、トニョが1列で、ハンドルに手をかけて。かどでチリン。ブレーキもかけず、ぶつかりもせず、ふんすいをひとまわりした。

「チェックポイント1、1回でクリア」と、トニョは通りすぎざまに言った。



中庭に着いたのは、ほとんど夜だった。マラさんはミニぶたいを箱にしまって、店へ持ちかえった。

今日のことをメーターにメモした。3つのマスには名前がはいっていた。それなのに、道でぶたいが開いてしまっていた。メーターには、なにかがたりなかった。なにか、わからなかった。

3にんメーター

	もつ 	あんない 	みちあけ 	
みせ → なかにわ	グニと ノア	フリータ	フリータ	
店 → ぶんすい	グニと ノア	フリータ	フリータ	ひらいた・やりなおし 3回

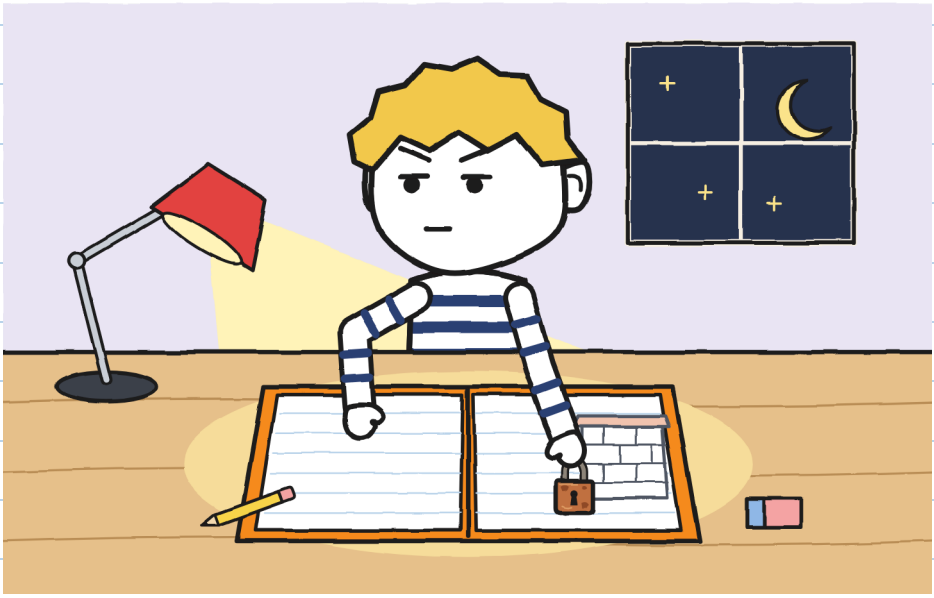
?

その行に、わたしの名前が2回出てくる。2回とも、わたしはそこにいなかった。 ーJ.

家で、さいごのページに、火曜日にへいのうらで見つけていたものをかいた。ひとりなのに、手でかくした。

考えた：「明日またしっぱいするはず。そしたら、これを出す」

いい計画だと思った。時間まで決めてあった。



このページは、木曜日に読んだ。すきじゃなかった。水曜日にわたしが書いたページも。 —J.

第 3 章

グニの ちずは やくに たつ？

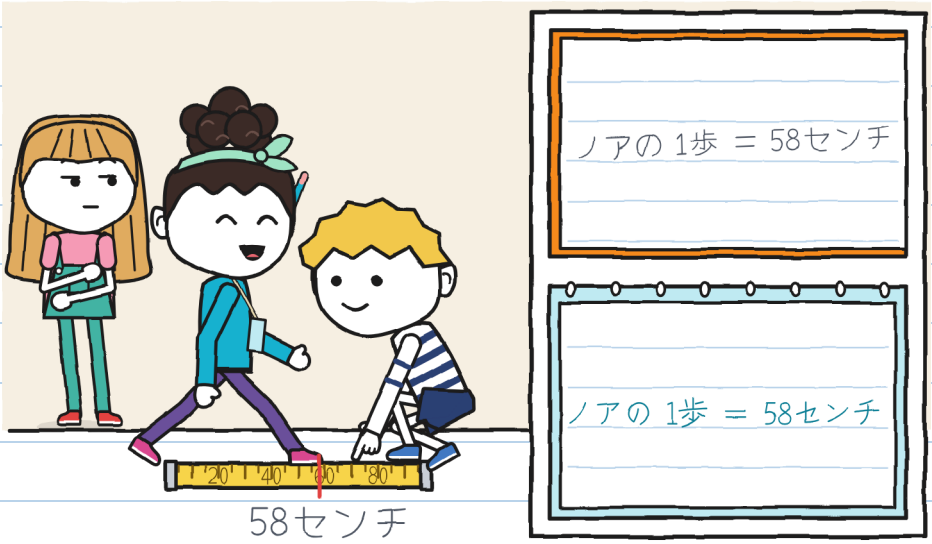
その夜、地図をぜんぶ作った。上から見た中庭（うち）、はかったへい、門、ふんすい、3つの区間。そして裏には、火曜日のこと。

とてもいい地図ができた。4つにおって、ノートにはさんだ。



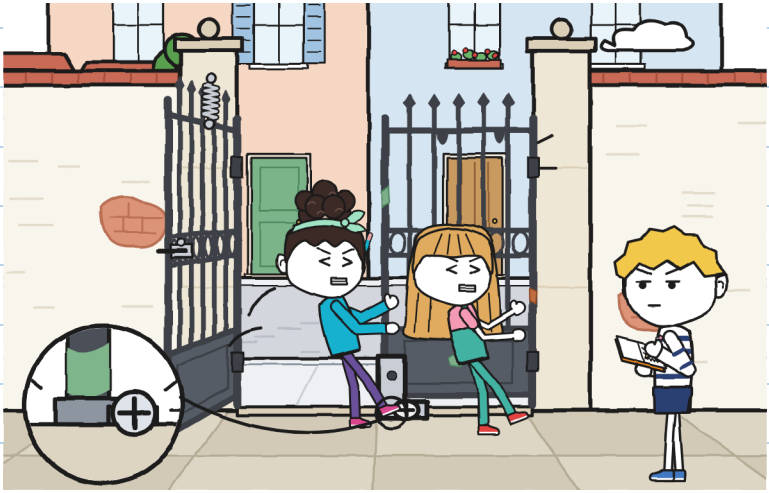
木曜日、店でノアが数えていた。
「ドアから段差まで6歩。段差から街灯まで11歩」
「それはまきじゃくではかるものだ」とぼくは言った。
「わたしは歩ではかるの。歩はいつも身につけているから」

ノアの1歩をはかった：58センチ。ノアはそれをメモちょうに書いた。ぼくはノートに。フリータは、同じ時刻をさす2つの時計を見るみたいに、ぼくたちを見ていた。ノアはもうひとりのフリータになると思っていた。ちがった。ノアは数える。



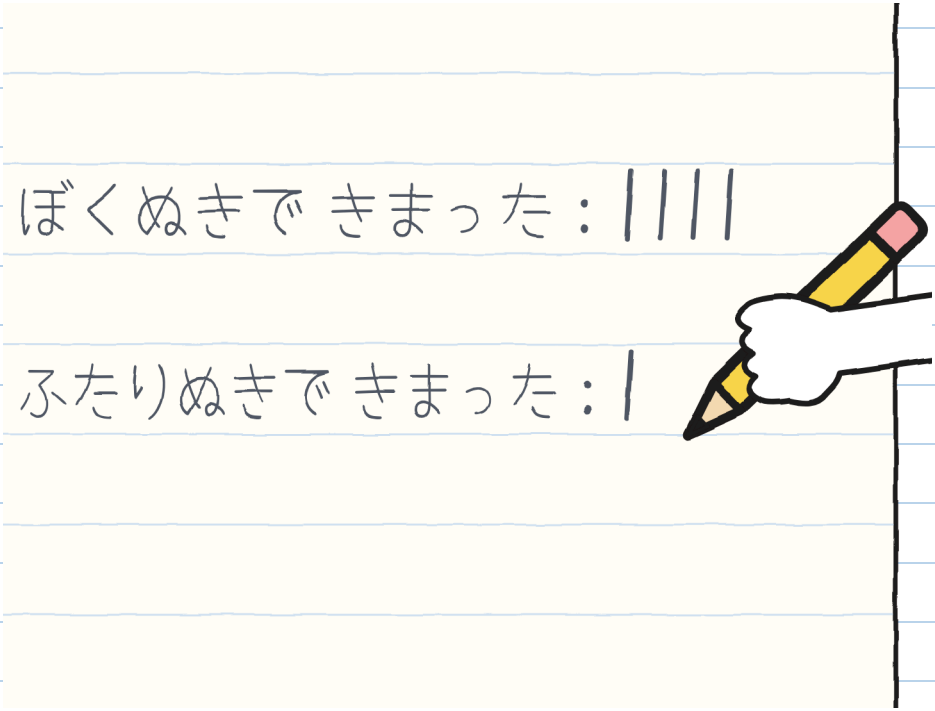
イレーネさんと中庭へ行った。フリータとノアは、自分たちの考えを試したかった：門の2枚のとびらを開けること。
1枚めのとびらはひとりでに開いてしまる。2枚めは開かなかった。ペンキの上にペンキがぬってあって、地面にはネジがある。

「じゃあ、ラベルがまちがってる」とフリータが言った。
「絶対」とノアが言った。
2秒で決まった。ぼくはぼうせんのためにえんぴつを出した。5本めだった。



かかなかった。

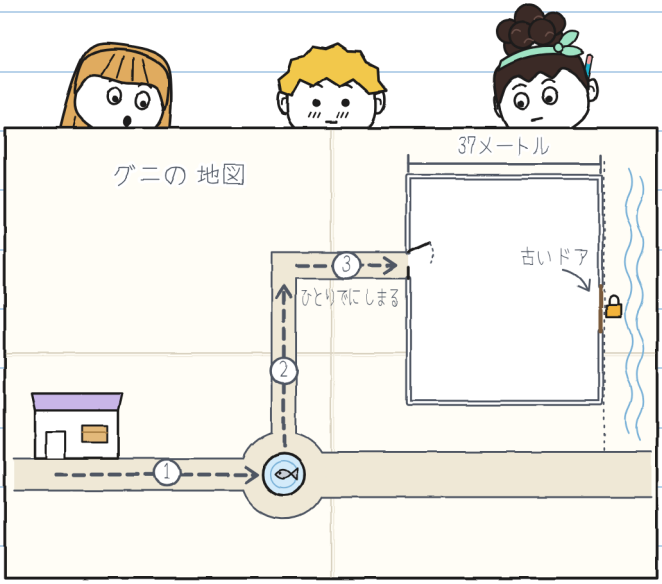
ぼうせんの列を見た。1本たりなかった。火曜日、へいのうらで、ぼくもだれにも聞かずに一つ決めていた：だまっていること。



「ラベルはまちがってない」とぼくは言った。思ったより大きな声が出た。「中庭にはもう一つドアがある。裏の、うんがの路地に。古くて、かぎがかかっている。火曜日に見つけた」

ぼくは地図を取りだして、ミニぶたいの上で広げた。

「火曜日？」とフリータが言った。
「火曜日。あとで正しかったと言うために、とっておいた」



しばらくだれもなにも言わなかった。はかってみた：長かった。
「わかった」とノアは言って、ドアを自分の地図に写した。
フリータは「わかった」と言わなかった。足をゆらしていた。
「昨日あれば、すごく助かったのに」
「うん」

中庭にはかくれるすみがない。さがしもしなかった。ぼくはその場で、地図を広げたまま、立っていた。



「わかった」と言わなかったのは、まだほんとうじゃなかったから。 —J.

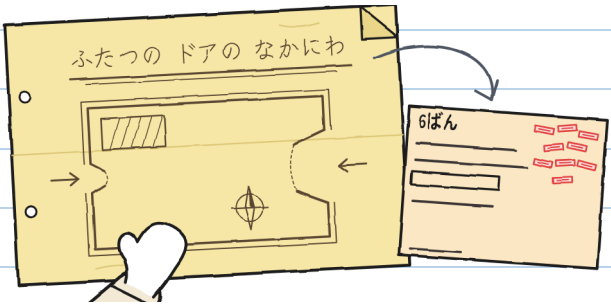
3人で、イレーネさんといっしょに見に行った。ノアはへいを数えた：64歩。ぼくはもうはかっていた：37メートル。おなじだった。

ふるいドアは木でできていて、2枚（まい）のとびらがあり、きょじんのベッドくらい広い。ロックは、ロックよりさびのほうが多い。

「何年もしまったままです。わたしはずっとこのままのすがたしか見たことがありません」とイレーネさんは言った。



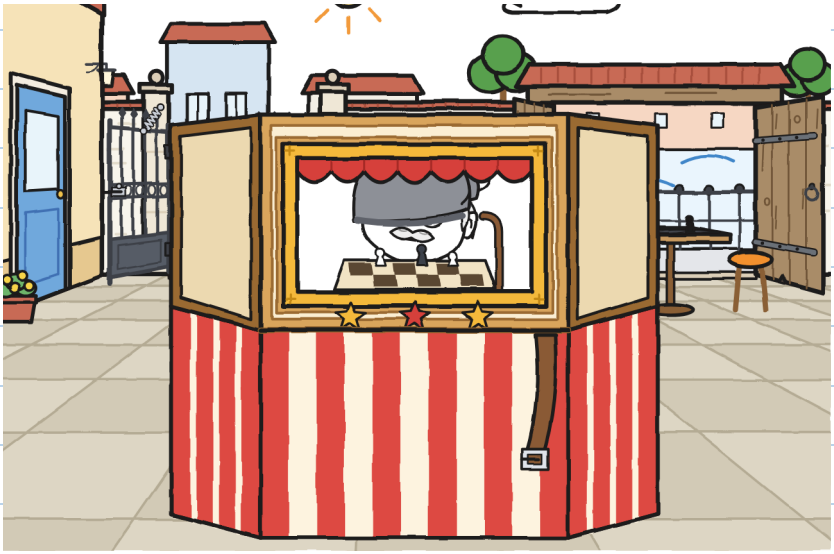
イレーネさんはセンターのとうろくをさがして、きいろいかみを見つけた。
「ここにあります。このドアが使われていたころ、なかにわへは入口が2つありました：門か、ここです。そこは『ふたつのドアのなかにわ』とよばれていました。そしてどのグループの中でも、なかにわでれんしゅうしているのは劇（げき）だけです」
「じゃあ、ラベルはなぞなぞじゃないんだ」とノアが言った。
「住所だよ」とぼくは言った。
『なかにわのこうぼう。ふたつのドアからはいる』。
ちゃんと書いてあった。古かっただけ。



あとでマラさんは、そのロックを9回見たと言った。しまったドアはもう数えないと思っていた。 —J.

かぎはファイルのふうとうにはいっていた：『ふるいドア。なくさないこと』。イレーネさんがロックをあけた。ドアはふねのきしむようなおとをたてた。

中に入ると、なかにわではチェスの人たちがテーブルをひなたに出していた。イレーネさんはまんなかでミニぶたいを開いた。ふたつのドアのあいだにどれくらいばしょがあまるか見るために。たっぷりあまった。
ミニぶたいのまどから、ベレーぼうを目の上にのせたアントニオさんが見えた。つぎの一手を考えている。すこしいびきをかいていた。



「土曜日は2つともあけます」とイレーネさんは言った。
「じてんしゃはふるいドアから、うんがのろじから入ります。歩いてにもつを運ぶ場合は、歩道から門を通ります。そうすればぶつかりません」
「でもふるいドアのほうが広い」とフリータが言った。
「それに、ひとりでにしまらない」
「それに門はあなたたちのものでしょう。こうぼうがミニぶたいを広場へ運ぶなら、もっとひどいドアもありますよ」
フリータは口を開けた。ノアを見た。ぼくを見た。
「グニはどう思う？」
1週間ではじめてだった。ぼくは日づけといっしょにメモした。



ぼくは、門がいい、ただしれんしゅうしてから、と言った。ノアもおなじことを言った。フリータは「わかった」と言って、こんどははんぶんほんとうだった。

あとでメーターをなおした。3つのマスのどれも、きのうのことにもぼくのことにも合わなかった。

3にんメーター（4つめ つき）

	もつ 	あんない 	みちあけ 	しらせ 
なかにわ、2かいめ	フリータと ノア	フリータと ノア	グニ	グニ、なし
店 → ふんすい	グニと ノア	フリータ	フリータ	だれも

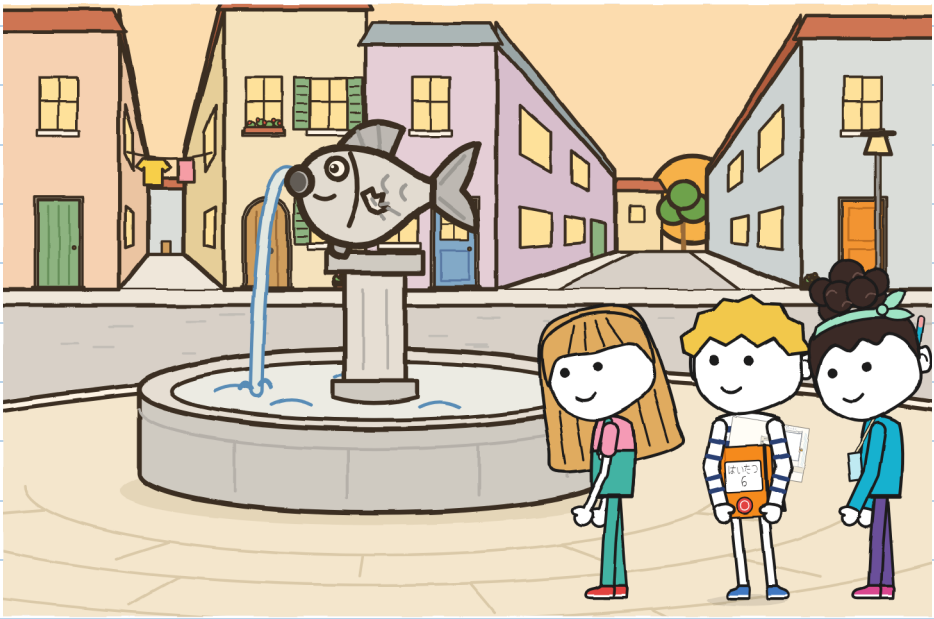

しらせ：しっている ことを 言う

3にんメーターにはマスが4つある。もんくはない。4つめがいちばんむずかしい。 —J.

ふんすいを通ってもどった。ぼくはさかなの前で立ちどまった。ひれのないがわで。

「その話、おしえてくれる？」
「長い話だよ」とフリータが言った。
「土曜日に」とノアが言った。「たどりつけたらね」

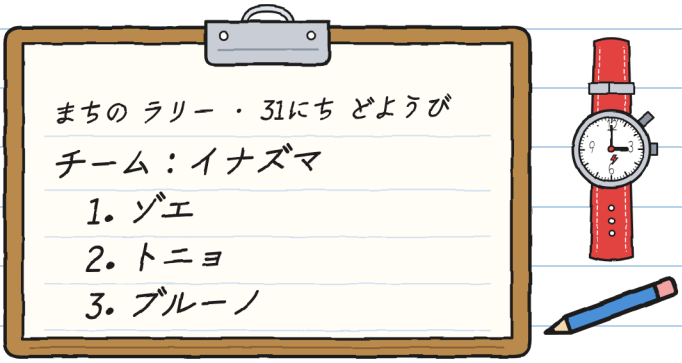
「いや」じゃなかった。ぼくは地図をノートにしまった。こんどはおらずに、半分のぞいたまま。



第 4 章

だれでも あんないできる？

金曜日にトニョが店に来た。時計とえんぴつと、イナズマのもうしこみようしを持っていた。



「書いたのはゾエだ」とトニョは言った。「ブルーノが『ブルーノ、てんてんつき』と言って書かせた」

「ゾエは？」

「ブルーノと書いた。てんてんつきで」

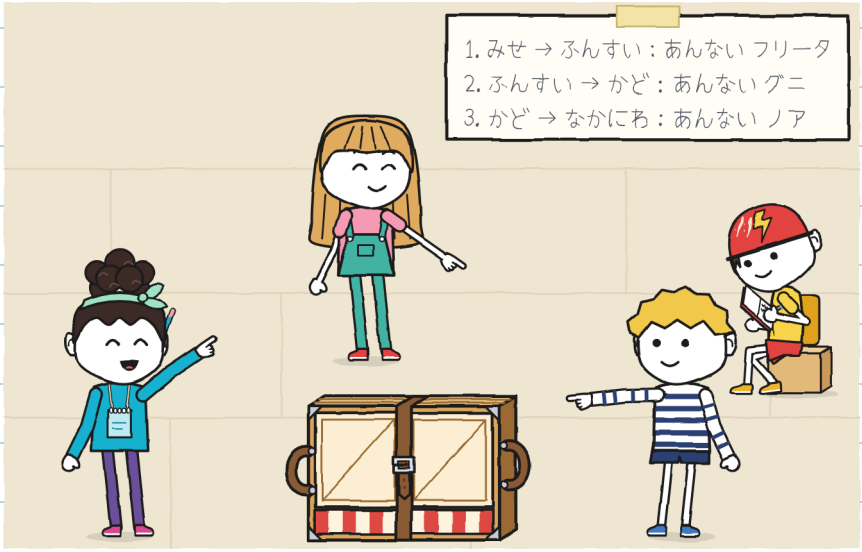
そのあとはこにすわって、とけいをゼロにした。

「きょうはじかんをはかる。いけんは言わない。やりなおしたことをメモする」

ノアの考え：こうたい。3つの区間で、区間ごとにあんないする人がかわる。ぼくの考え：あんないとみちあけはおなじ人で、手のあいている人。ほかの2人はミニぶたいしか見えないから。フリータの考え：もうはじめる。

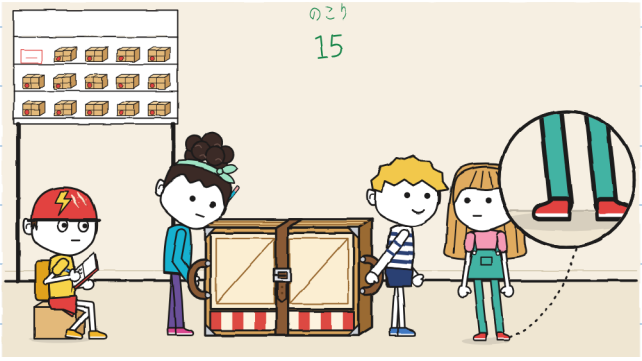
「さいしょはだれがあんない？」
3人がいっせいにゆびをさした。みんなほかの人をさした。

トニョがメモした。イレーネさんはファイルを持って入口で待っていた。やはりいけんは言わなかった。



ミニぶたいを持ちあげる前に、フリータが言った。
「ひとつ言うね。水曜日、ノアしかわからない指示を出して、それから、グニがまいごになったって言った」
それ以上は言わなかった。言うひつようもなかった：ぜんぶ入っていた。

「わかった」とぼくは言った。ノアからならった。
「さかなのどっちのがわにひれがない？」とぼくは聞いた。
「ひだり。来るほうから見て。ふんすいで左に曲がる。5歩前に知らせる」
「それならちゃんとした指示だ」



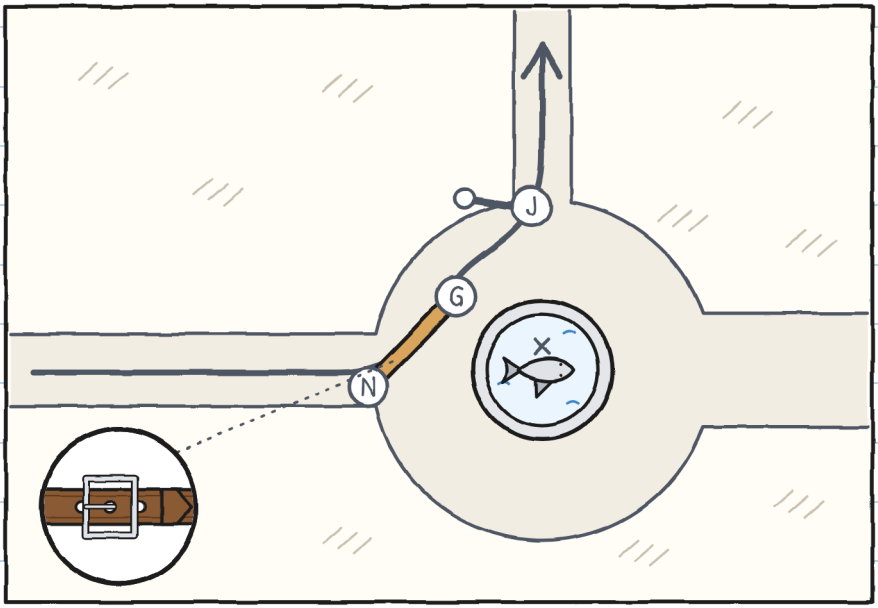
りょうほうのあしがとまっている。絵でたしかめて。 —J.

区間1。ノアはベルトを2つめの穴（あな）にとめた。

「5歩…左に曲がるよ！」
「ベルト！」とノアが言って、ベルトをおさえた。

かたひれの魚のまわりを、まるでいつもしていたみたいにまわった。パタンはなかった。

「区間1：6分」とトニョが言った。「やりなおし：なし」

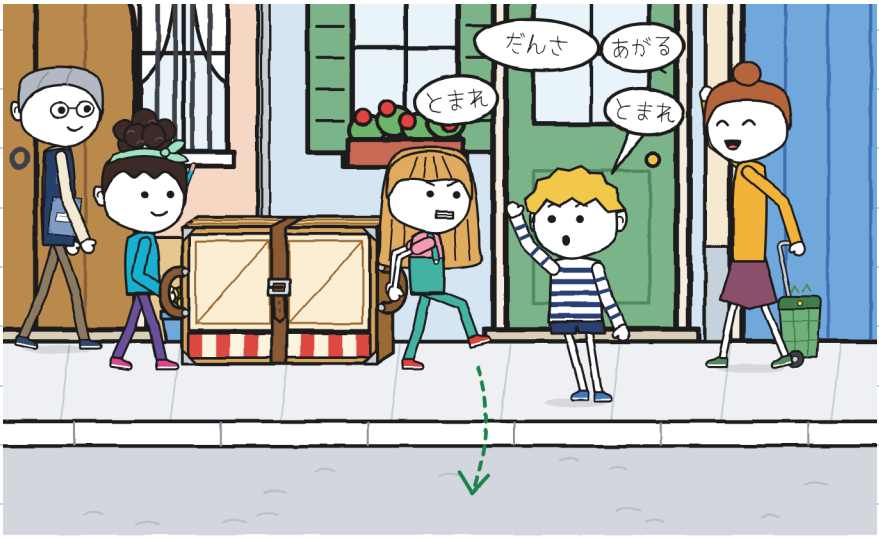


区間2、ふんすいからかどまで。フリータとノアが持って、ぼくがあんないした。

ぼくのあんないはこう：

「3歩。とまれ。だんさ。あがる。2歩。とまれ。女の人。こんにちは。女の人が通る。4歩」

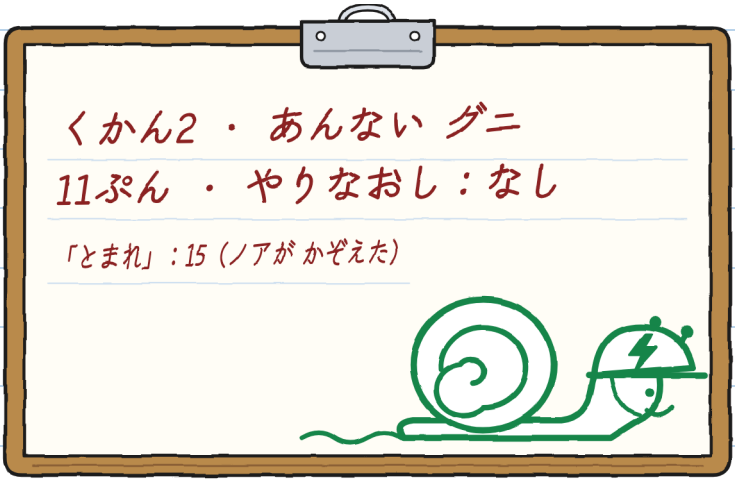
フリータはとってのところで、ひと言も言わずに前を歩いた。足がひとりでに近道へ向かう。それをぼくのみちにもどした。



「区間2：11分」とトニョが言った。「いままではかった中でいちばんおそい。やりなおし：なし」

ぼくがなにかをあんないしたのははじめて。しかも、やりなおしはなかった。

「『とまれ』を14回言ったね」とフリータが言った。
「数えたよ」とノアが言った。「15回」
「6回はよけいだった」とフリータが言った。「でもぜんぶやったよ」



どれにもさからわなかった。歯をくいしばりすぎていたかった。 —J.

区間3、かどからなかにわまで。持ったのはフリータとぼく。ノアは、イレーネさんがぜんぶのチームにくばっていたラリーのちずであんないした。

20歩行ったところでノアは立ちどまった。うんがのろじのはじまるところ。

「合わない」

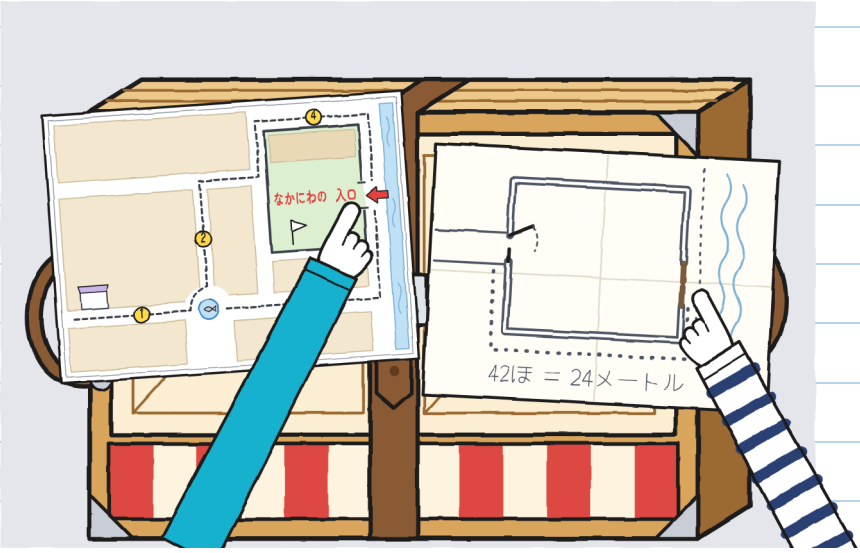
「なにが？」

「ちずはぼくたちをここから入れる。ふるいドアまで。でも入るのは門から。反対がわだよ」



ミニぶたいを地面におろした。まずおろす。はなしあうのはそれから。
ぼくの地図をノアの地図のとなりにおいた。ラリーの地図には入口が1つしかかいてなく、それは門じゃなかった：ふるいドアだった。
「ふるい地図だよ」とぼくは言った。「あそこから入っていたころの」

そこから門まで、ノアの歩で42歩。ぼくのはかったので24メートル。ノアの歩とぼくのまきじゃくがあれば、町じゅうはかれる。



「イレーネさんに言う？」とフリータが聞いた。
「ほかのチームにも」とノアが言った。「そうしないと、歩きの人はみんなろじに入りこんじゃう。じてんしゃといっしょに」
ぼくはなにも言わなかった。さんせいだった。

イレーネさんはちずを1枚(まい)ずつ、あかいペンでなおした。
トニョはじぶんのを見た。
「イナズマはちずのとおりに入るつもりだった」
「あなたたちはそこから入ります」とイレーネさんは言った。「じてんしゃなら、ちずで合っていました。たまたまですが」



かどへもどって、区間3をもういちどやった。こんどは門まで。フリータとぼくが持ち、ノアはあんないして、みちをあけて、知らせた。ぜんぶいっしょに：

「とまれ！とびらをおさえてる！通って！」

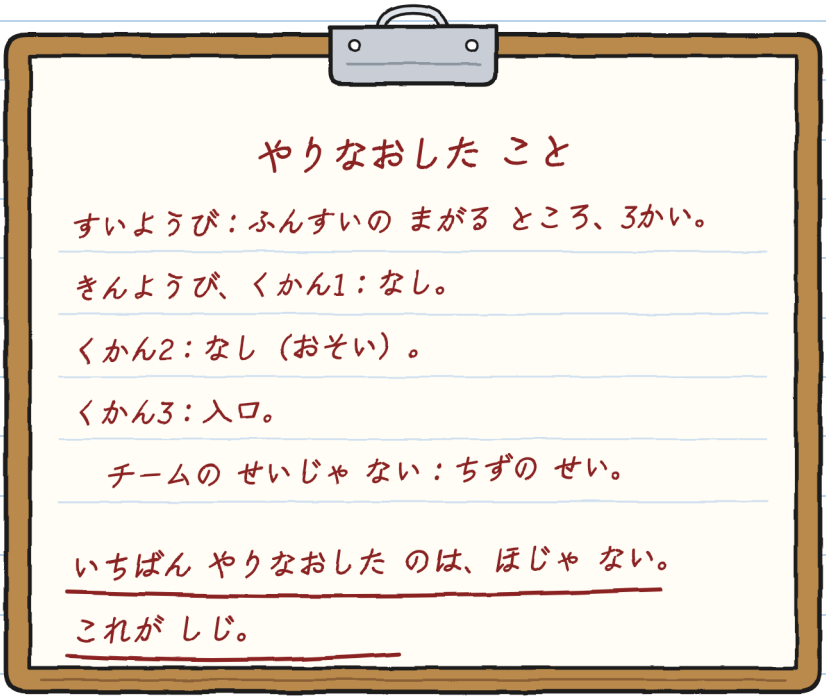
通れた。ぼくはメーターをうめた。

	もつ 	あんない 	みちあけ 	しらせ 
かど → なかにわ	グニと フリータ	ノア	ノア	ノア： 「ちずがまちがっている」

マスがぜんぶうまったはじめての行。そして4つめ、しらせのマスはノアがうめていた。

門はおもい。せなかでおさえた。あなたが火曜日にしたみたいに。メモはわたしがする。あなたはしないから。 —J.

トニョがかみを見せてくれた。



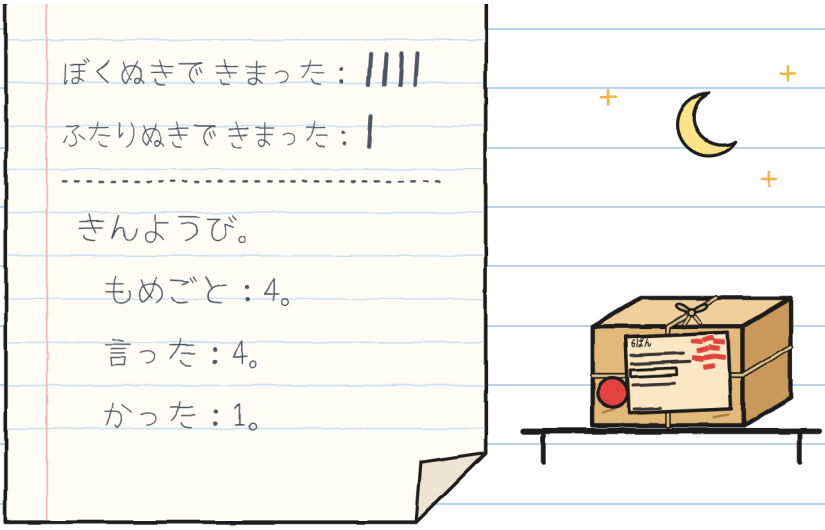
「それはいけんだよ」とフリータが言った。
「データだよ」とトニョは言った。「イナズマでは、みちをまちがえて言うと2回そんする。いきもかえりも」

トニョはヘルメットをかぶって、じぶんのぶんをれんしゅうしに行った。チリン。

夜、店でマラさんはミニぶたいをはこにしまった。ノアはバックルを見た。

「あしたは3つめの穴(あな)に。はずれるのに時間がかかっても」

ぼくはノートのすみ、ぼうせんのところを開いた。きょうはひとつも引いていなかった。もめごとは4つ。4つとも声に出して言った。ぼくがかったのは1つ。

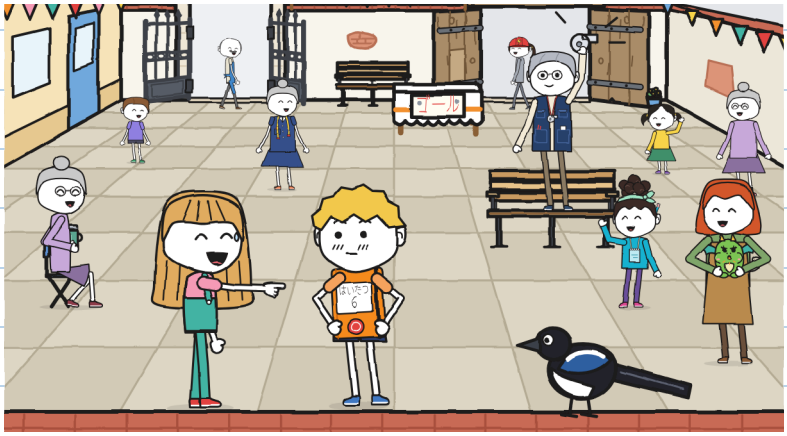


きみがかったのは、もめる前にミニぶたいをゆかにおくほうだよ。それはあげる。 —J.

第５章

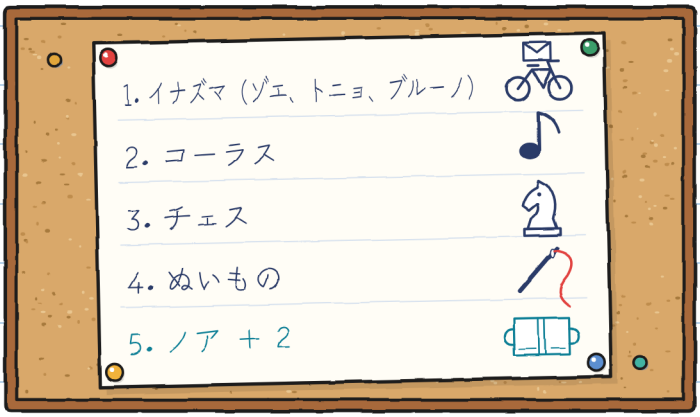
いちばんに つかなくて いいの？

土曜日に、土曜日のオレンジのTシャツを着た。
「ノートとおそろいだね」とフリータが言った。
11時に、なかにわのドアは何年ぶりかでふたつとも開いていて、人はどちらからも入ってくる。イレーネさんはホイッスルを持って、きまりを言った：
「どのチームも、荷物をここまではこぶこと。ぜんぶの区間を通って。荷物を持ったらはしらない。はしったら、その区間はやりなおし。やりなおさなければ、時間を稼げる」



リストに5チームあった。イナズマはふうとうを持って、自転車。コーラスはがくふだい。チェスはおおきなばん。ぬいものはくびのないマネキン。

ぼくたちのチームは、月曜日にノアが書いた。ぼくを知る前に：



「ぼくたちは『ノア＋2』だね」とフリータに言った。「わたしが2」とフリータは言った。「あなたは『＋』だね」

どのチームも、荷物がねむっているドアから出た。ぼくたちの出発のあいずは、近くに住んでいてはしらないアントニオさん。

マラさんがミニぶたいを出した。ノアはいそいでベルトをとめて、3人で持ちあげた。カチッ：1まいのかべが少し開いた。

「ゆかに！」とぼくは言った。

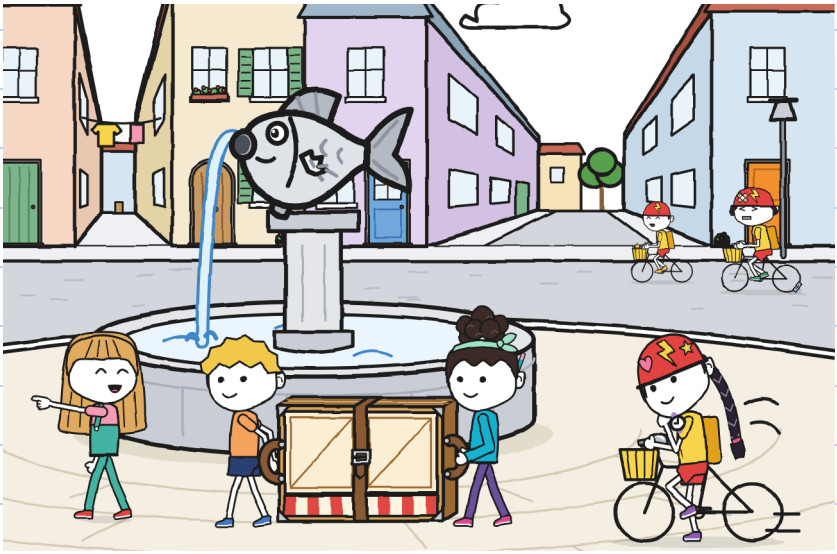
だれももめなかった。2回目は、ノアがゆっくり3つめの穴にとめて、ためしに2回ひっぱった。

アントニオさんはベレーぼうを下げた。はたのかわりだ。

「ゆっくり」と言った。「そうして着くんだ」

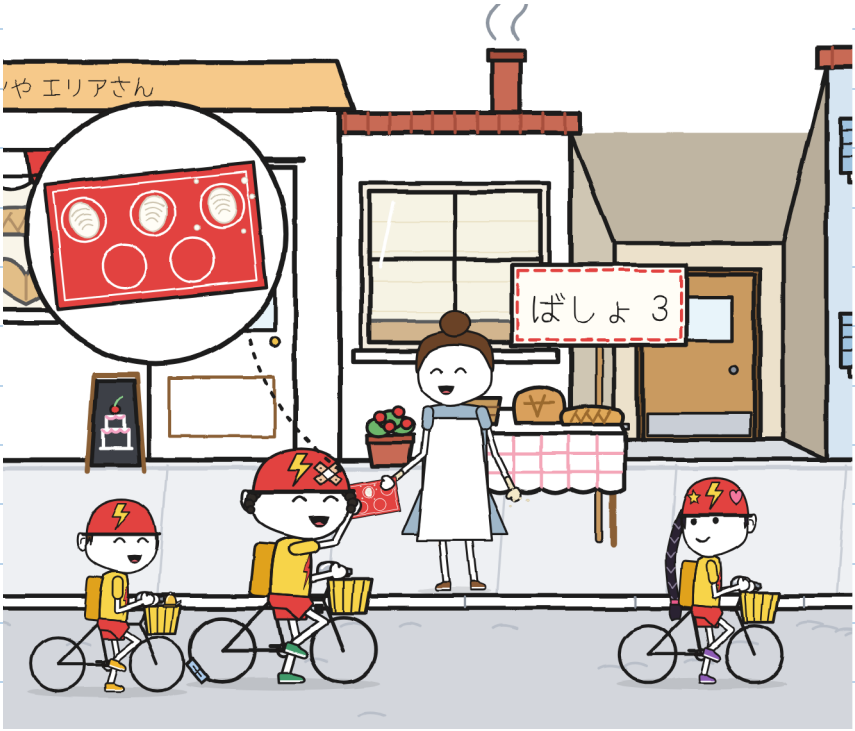


区間1。フリータがあんない。
「5歩…左に曲がるよ！」
「ベルト！」
ぼくたちはかたひれの魚のまわりをゆっくりまわって、かどをぜんぶふさいでいた。そこへゾエが自転車で来た。みんなの中でいちばん先だった。ブレーキをかけて、足を地面についた。
「先にどうぞ。それじゃはしれないでしょ」
ゾエはぼくたちがかどを出るまで待って、それから行った。20秒のあいだ、ぼくたちが先だった。ゾエがじぶんではかった。

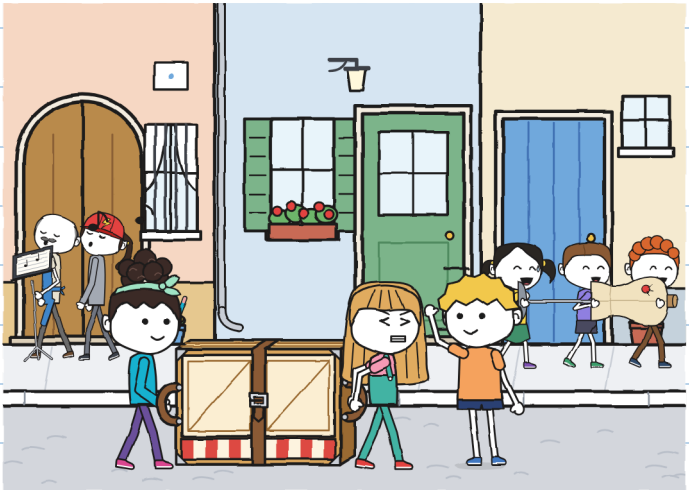


どのばしょでもカードにスタンプをおしてくれた。パンやのカードはエリアさんが持っていて、こなだらけのおやゆびでおした。

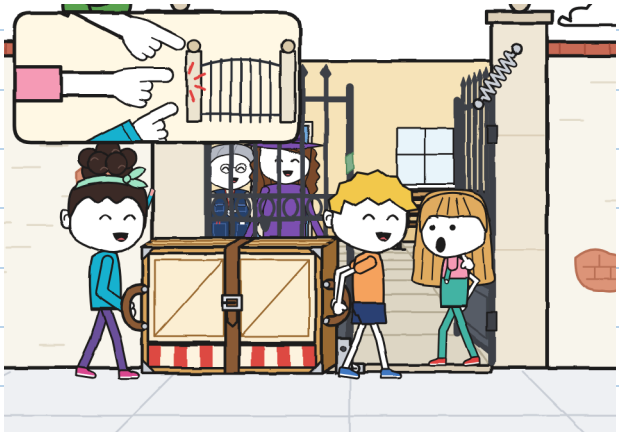
イナズマは3回ぼくたちの前を通った。いつもべつの道から。トニョはりょう手でハンドルをにぎって、かどでベルをならした。ブルーノがふうとうを持った。ゾエは先に行って、どのばしょでも3人を待った。3人そろうまで、カードにさわらなかった。



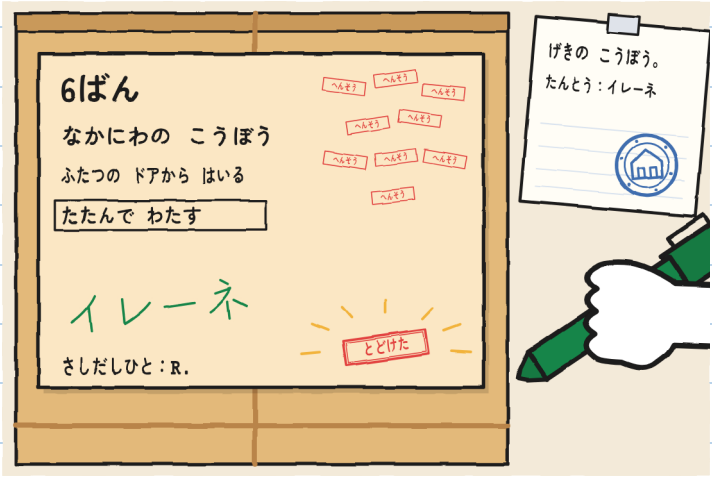
区間2で、コーラスががくふだいを持ってぼくたちをぬいた。はしって。イレーネさんのホイッスルが鳴ると、コーラスはふんすいにもどった。小さな声でうたいながら。
チェスもぼくたちをぬいた。マネキンまでぼくたちをぬいた。
フリータははしらなかった。いや、足がひとりでに出た。ひきもどした。
「いちばんにつかなくていいの？」と聞いた。
「ラベルに『いちばん』とは書いてないよ」とノアが言った。「『たたむ』と書いてある」
「ふちいし」とぼくは言った。



区間3。ノアがとびらまであんないした。そこでミニぶたいをゆかにおいた。
「だれがあける？」とフリータが聞いた。そして答えを待った。
3人いっせいにゆびさした。3人ともおなじところ：ノアはとびらをゆびさし、フリータもとびらをゆびさし、ぼくもとびらをゆびさした。それからわらった。これじゃだれがあけるかきまらない。
「きみが」とノアとぼくは言った。ノアはじぶんのとってにうつった。
フリータはせなかとりょう手でおさえた。
「とまれ！とびらをおさえてる！通って！」
通れた。たたんだまま。ぜんぶ。

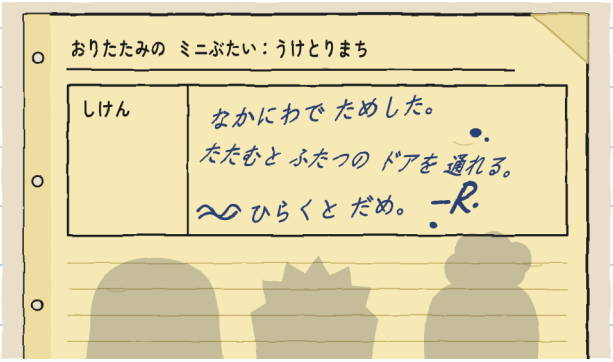


「41ぷん」とイレーネさんは言った。
イナズマは14分だった。3人はゆかにすわって、自転車のとなりで、あせもかいていなかった。
マラさんがはこをかかえて来た。イレーネさんは、じぶんのなかにわのゆかにたたんであるミニぶたいを見た。ベルトもちゃんとついている。ファイルを開いて、マラさんに登録のかみを見せた。フリータがみどりのペンをわたした。
「これでいい」とイレーネさんは言って、ラベルにサインした。



ラベルに「とどけた」というじが出た。だれも書いていなかった。

イレーネさんは、ミニぶたいを書きこもうと、びひんリストを開いた。その必要はなかった：もうページがあって、そこにはふるい1ぎょうが、ひどい字で書いてあった。



「わたしが工房を見る前のことです」とイレーネさんは言った。「だれが書いたのか知らない」

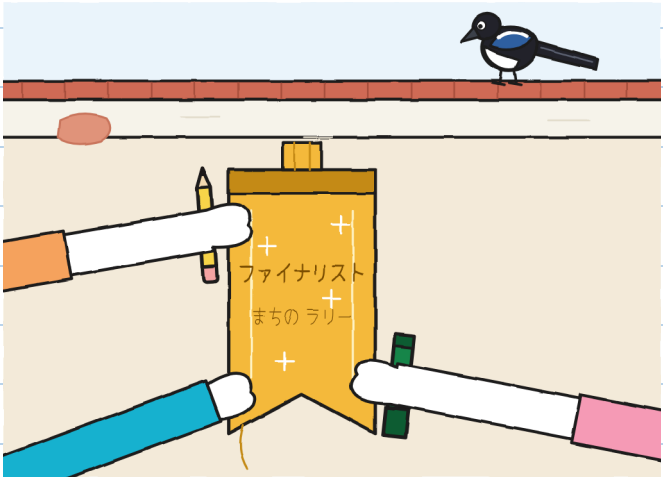
「わたしたちも知らない」とフリータが言った。「でもだんだんわかってくる」

R.はそのなかにわにいて、送る前にミニぶたいをためした。こんどは2つのドアをはかった：とびらと、ふるいドア。

エリアさんのドア。なかにわのふたつ。ドアをはかる人。ファイルに書く。 -J.

イナズマがかった。やりなおしは1回もなし。ごほうびは、エリアさんのおおきなまるいパンで、こなで1と書いてあった。ゾエは3つにわけた。ブルーノのぶんはゾエのぶんとおなじおおきさ。

荷物をぜんぶ持って着いたチームに、イレーネさんはリボンをくれた。



「ファイナリストはさいごに着く人」とフリータが言った。
「さいごまで着く人だよ」とノアが言った。
「ぼくたちはさいごにさいごまで着いた」とぼくは言った。「どっちもほんとうだね」

「せっかくここにあるのだから」とイレーネさんは言った。「はじめてつかうとしましょう」
マラさんとイレーネさんがひらいた。ぼくたちはそのうしろ。2分でげきをつくることになった。ノアがやくをわけた。その前に聞いた：
「あまりしゃべらない人は？」
ぼくは手をあげた。
パンくずはベラさんからはなれて、1メートルとんで、かべの上にとまった。しっぽがまどの前にたれた。げきはもうはじまっていたのだ。まだはじめてもいないのに。



げきのなまえは「はいりたがらないにもつ」。フリータはマラさんのやくで、かみのぼうしをかぶった。ノアはぜんぶのドアのやく。ぼくはにもつのやくで、まどからかおを出した。

「こうぼうは？」とノアが言う。「ここはぬいものだよ」

「かえす」とぼくが言う。

9回言った。おきゃくさんが数えていた。10回目に、ノアがりょううでをひろげた。ぼくはもうひとつのことばを言った。

あいさつのときは、3人でまどにかおを出した。はいれた。ぎゅうぎゅうで。



ばらばらにはしない。ひとりがちぢむ。 —J.

第 6 章

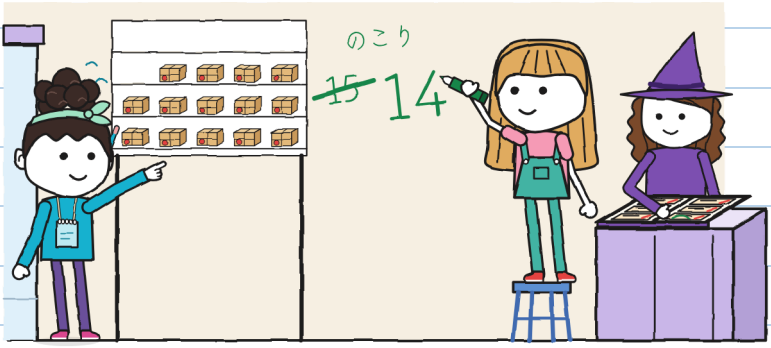
ラリーが おわって、なにが のこる？

午後、ラベルを持って店にもどった。ノアもいっしょに来た。フリータははりがみを見て、それからマラさんを見た。

「いい？」

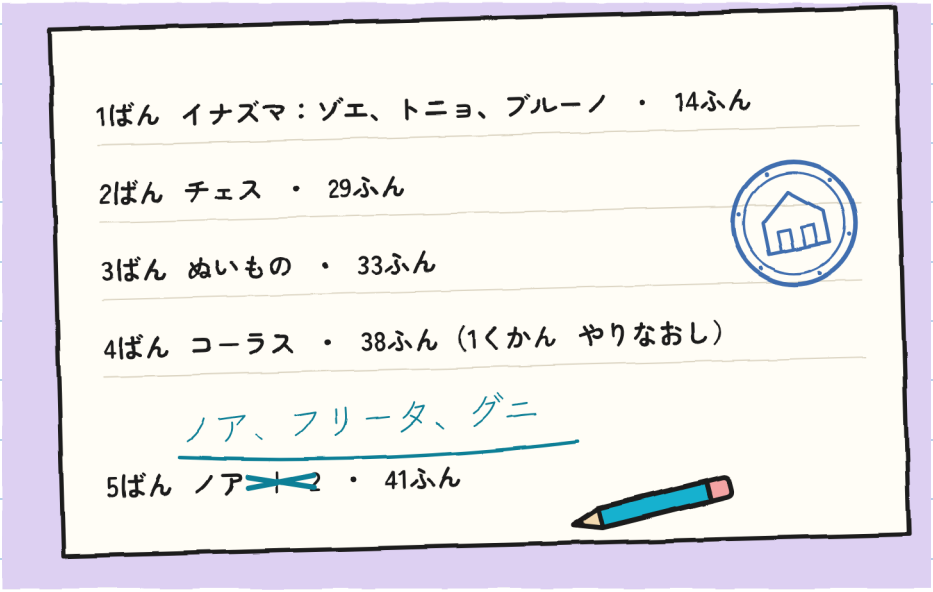
「あなたのはりがみでしょ」

フリータは15を線で消して、大きく14と書いた。マラさんはラベルをじぶんのとうろくノートにはった。ほかの5まいといっしょに。



ノアは小さな声で数えた。14になった。ノアは数えられる。 —J.

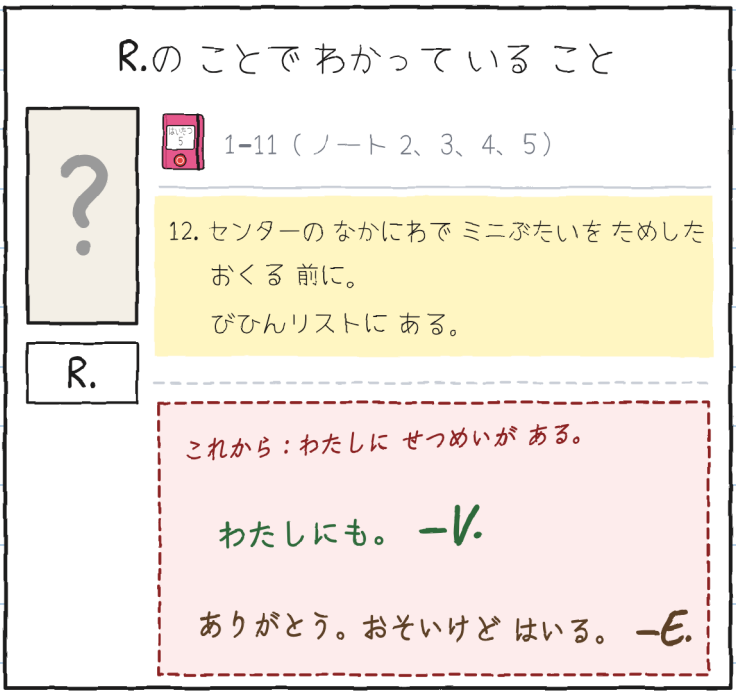
トニョがじゅんいを持って来た。ノートに書きとめるために。



2回見た。「ブルーノ」はそのまま、線も引いてないし、上に何も書いてない。

ぼくたちのチームのところは、ノアがターコイズのえんぴつで、だれにも頼まれずになおした。
「月曜日は、あなたたちがなんていうのか知らなかった」と言った。「まあ、グニの名前」

R.のふだを出した。ヒントは11。1つ足した。
トニョはそれを読んだ。下のじぶんのメモも読んだ。何も線で消さなかった。
「ミニぶたいをためした」と言った。「おれのベルはためしてない」
「それはわからない」とフリータが言った。
「おれのベルのことは、どのびひんリストにも1ぎょうもない」とトニョは言った。それもほんとうだった。



それからちずをカウンターにひろげた。ああ、もうひろげてあった。

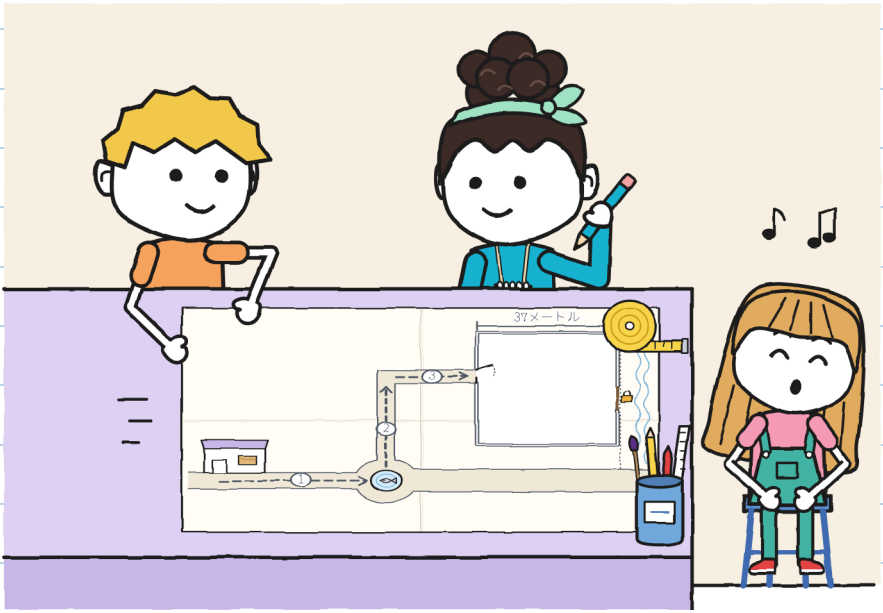
「きみのぶんがたりないんだ」とノアに言った。「ふんすいからむこうのところ。その道は、ぼくはメートルしか知らない」

ノアはフリータを見た。フリータは天井（てんじょう）を見た。口を出さないときのくせだ。

「かいていい？」

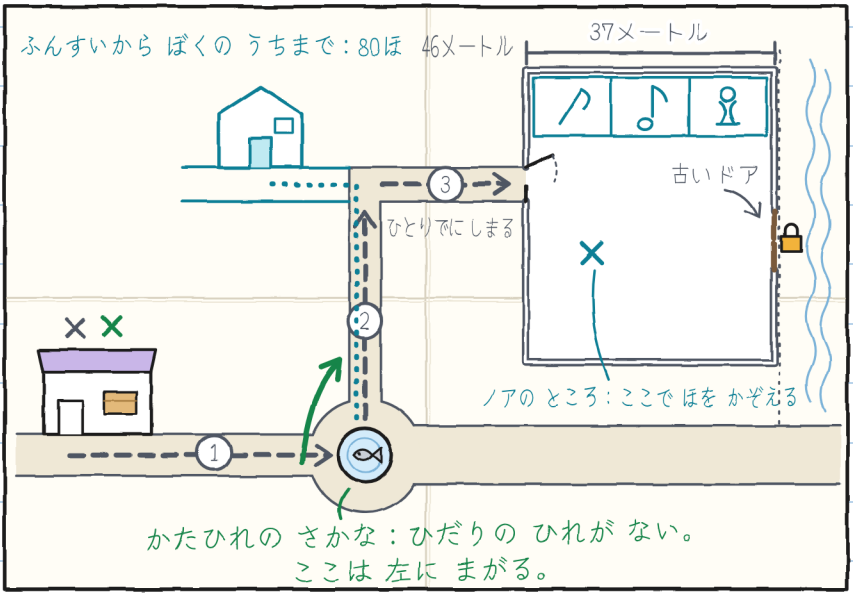
「そのために見せるんだよ」

ノアはみみのうしろからえんぴつをぬいた。



ノアはじぶんの道と、センターのなかと、きょりを歩数で書き足した。ぼくはよこにメートルを書いた。フリータはがまんできなくて、ふんすいのかんばんを書いた。

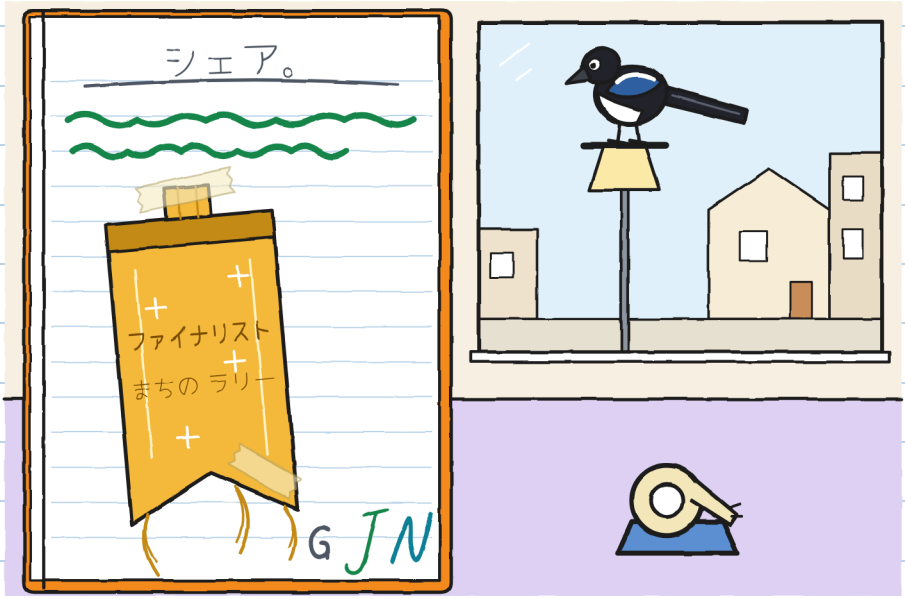
まちの ちず（3人の）



かいているあいだに、かたひれの魚の話を聞いた。長い話。みんなが言うほどよくはない。でももうおぼえた。

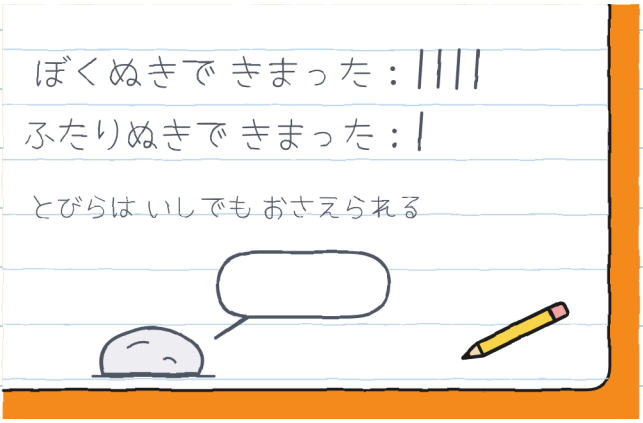
すごくいい話。ただ、わたしたちがへたに話した：かさなってしまった。 —J.

フリータはリボンを手首にむすんでいた。もういとが3本ほどけていた。
「わたしが持っていたら、月曜日にはふさになる」と言った。「ノートにしまおうか？」
1ページ目の「シェア」の下に、りょうはしにテープを1つずつつけてはった。ほどけたいともそのままかいた。
ほどけたらほどけたでいい：ほんとうよりあたらしくはかかない。



わたしのノートは、きみのほどよくとじない。だからね。 —J.

ノアはゆるしをもらって、ページをうしろへめくり、ぼうせんのすみに来た。
「これは？」
「まちがってつけていたけいさん」
「こっちは？」声に出して読んだ：「とびらはいしでもおさえられる」
「火曜日に思った」
「いしは『ふちいし』とは言わない」とノアは言った。
「『とまれ』を15回も言わない」
ぼうせんは消さなかった。えんぴつだから消せるけど、消したくなかった。



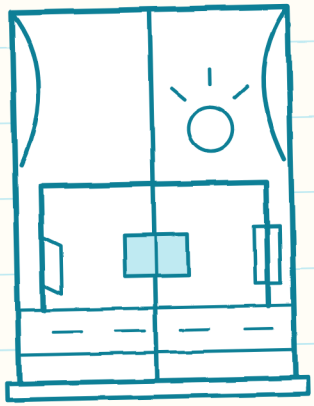
消さないで。ちょっとわたしのでもある。 —J.

日曜日の夜明け、センターの前に住んでいるノアが見はった。9時にメモを店に持って来た。歩数をかぞえながら来た。

7:38：ミニぶたいは こうばうで、たたんで ある。

7:44：夜が あける。うごかない。

7:50：そのまま。歩いた 歩数：0。 ーノア



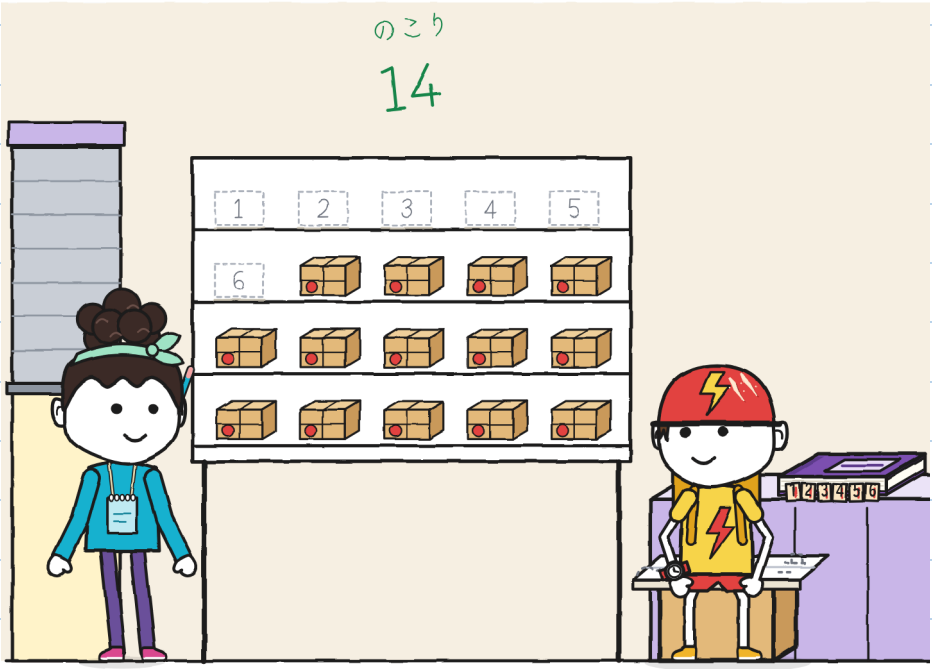


見はりもかぞえるのもわたしよりじょうず。パンはやかない。3つのうち2つ。 ーJ.

マラさんはシャッターを半分あげて入れてくれて、ぼくはたなをかいた：荷物14こと、あき6つ。はりがみはさわらなくてよかった。

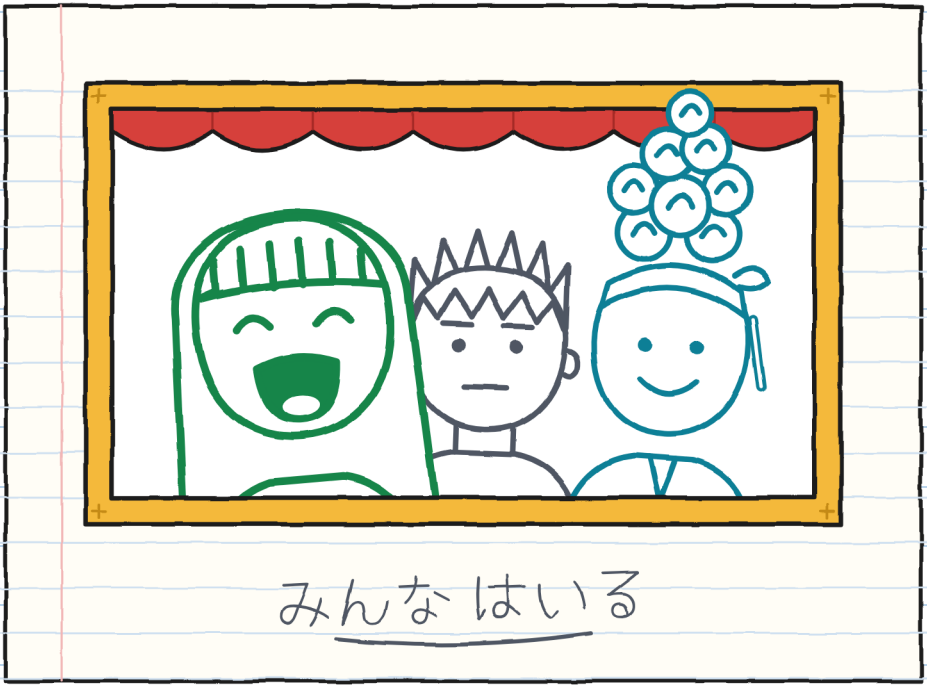
「6つ」とマラさんは言った。そして本をとじた。

トニョははこにすわって、日曜日なのにヘルメットをかぶっていた。ノアはドアのそばに立っていた。すわれとも、出ていけとも言われなかった。来たかったから来た。月曜日にはれんしゅうがある。



ノートのさいごに、ミニぶたいのまどをからっぽでかいた。

みんな中にじぶんをかいた。ぼくはえんぴつ。フリータはみどり。ノアはターコイズ。ノアはぼくのノートにかく前にゆるしをもらった。フリータはもらわなかった。



シェアはシェア。1ページ目に書いてある。 —J.

6ばんめのはいたつ。区間ごとに：

	くかん	だれが はこんだ	だれが あんない	なにが あった やりなおし
	みせ → かたひれの さかなの ふんすい	グニと ノア	フリータ	ふんすいの まがる ところ （3回）
	ふんすい → かど	フリータ と ノア	グニ	なし （でも ゆっくり）
	かど → なかにわ	グニ と フリータ	ノア	入口： ちずが ふるかった
	どようび	3人で	3人で、 こうたいで	ベルト（2回目で、 3つめの あなで）
	ぼくたちの 前	マラさん ひとり	だれも	9回 はこんだ
	R.	?	?	わからない

	もつ 	あんない 	みちあけ 	しらせ 
1	グニと ノア	フリータ	フリータ	フリータ
2	フリータと ノア	グニ	グニ	グニ
3	グニと フリータ	ノア	ノア	ノア

3つのらん。いや、4つ。3つのなまえ。からっぽはなし。 —J.

ありえない はいたつ ・ 7

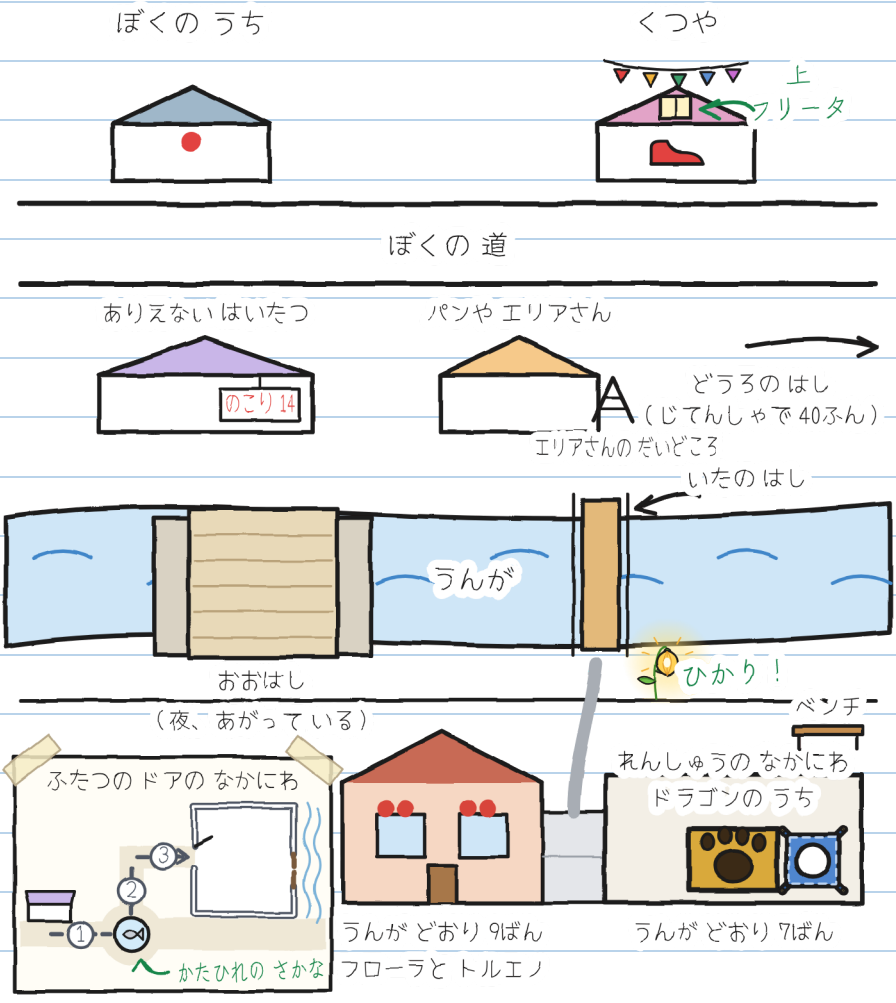
（もうすぐ）



こんどのラベルは、ぼくがもうパジャマの時間を言っていた。

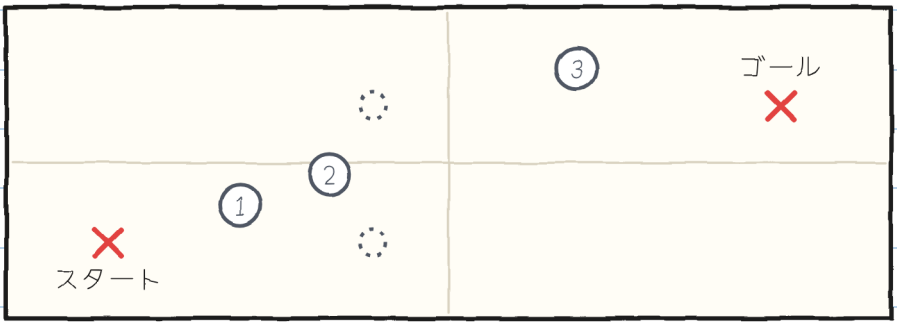
ほかのみんながしめるころ、だれがおきている？わたしのほかに。 —J.

まち（6ばんの ばん）


ぼくの うち
くつや
上
フリータ
ぼくの 道
ありえない はいたつ
のこり 14
パンや エリアさん
どうろの はし
（じてんしゃで 40ふん）
エリアさんの だいどころ
いたの はし
うんが
おおはし
（夜、あがっている）
ひかり！
ベンチ
ふたつの ドアの なかにわ
3
2
1
かたひれの さかな
れんしゅうの なかにわ
ドラゴンの うち
うんが どおり 9ばん
フローラと トルエノ
うんが どおり 7ばん

きみの みち

だれがはこぶ？だれがあんない？だれがみちをあける？
だれがしらせる？



3にんメーター

	もつ	あんない	みちあけ	しらせ
くかん 1				
くかん 2				
くかん 3				

ひとつのらんにいつもおなじなまえが出たら、かえてね。 —J.

ひとつの おはなし、6つの サイズ

サイズは6つ、3さいから16さいまで、ことばは20いじょう。
XXS、**XS**、**S**、**M**、**L**はページもえもおなじ。**XL**はしょうせつ。
かわるのはかたりかただけ。

サイズ XXS · PRE-A1
グニは ひとつ ことばを かいて、ばしょを あけた。「シェア」って ことば、みえる？

サイズ XS · A1
ぼくは ことばを ひとつだけ かいた。ページの はんぶんは あけて おいた。1ぷんも あいて いなかった。

サイズ S · A2
1ページ目に、ことばを ひとつ 書いた。ページの はんぶんは、ねんのため あけて おいた。1分も あいて いなかった。

サイズ M · B1
1ページ目に、ことばを一つだけ書いた。ページの半分は、念のためあけておいた。あいていたのは、1分もなかった。

サイズ L · B2
1ページ目に、ことばを一つだけ書いて、ページの半分は念のためあけておいた。あいていたのは、1分もなかった。

サイズ XL · B2-C1
イラスト小説 · 13+
CEFRのレベルは目安です。

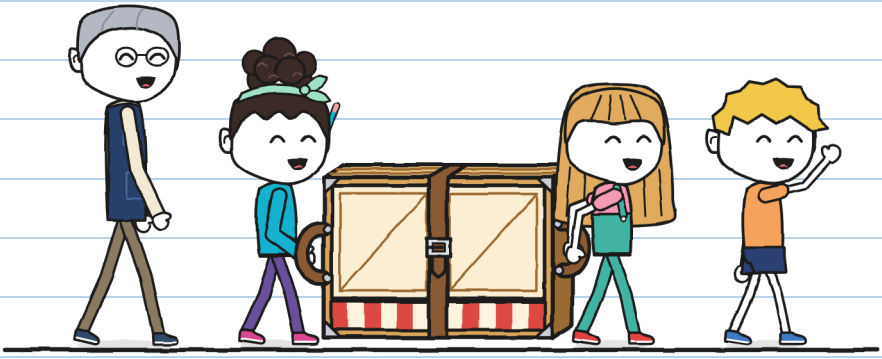
それぞれのサイズで。おなじミニぶたい。 —J.

かぞくと せんせいへ
linguaula.comでしょうごとにれんしゅう

ほんとうにはこぶとき：どうする

1. 出る前に、みちをぜんぶ見る。
2. ひとりは手があいている：ドアをあけて、しらせる。
3. 手はとってに。ちょうつがいとロックからはなす。
4. にもつをもったらはしらない、きょうそうしない。
5. だれかが「とまれ」と言ったら、みんなとまる。
6. まずゆかにおく。はなしあうのはそれから。
7. 大きいものは2人であけてたたむ。おとなといっしょに。

「おはなしのなかだけ」のはんこは、お話の中では起きても、ほんとうにはこぶときには起きないことのしるし。



みちのことで知っていることがあれば、先に言って。 —J.